

ポケット  
新落語大会



098039-000-9

特65-76

新落語大会（ポケット）

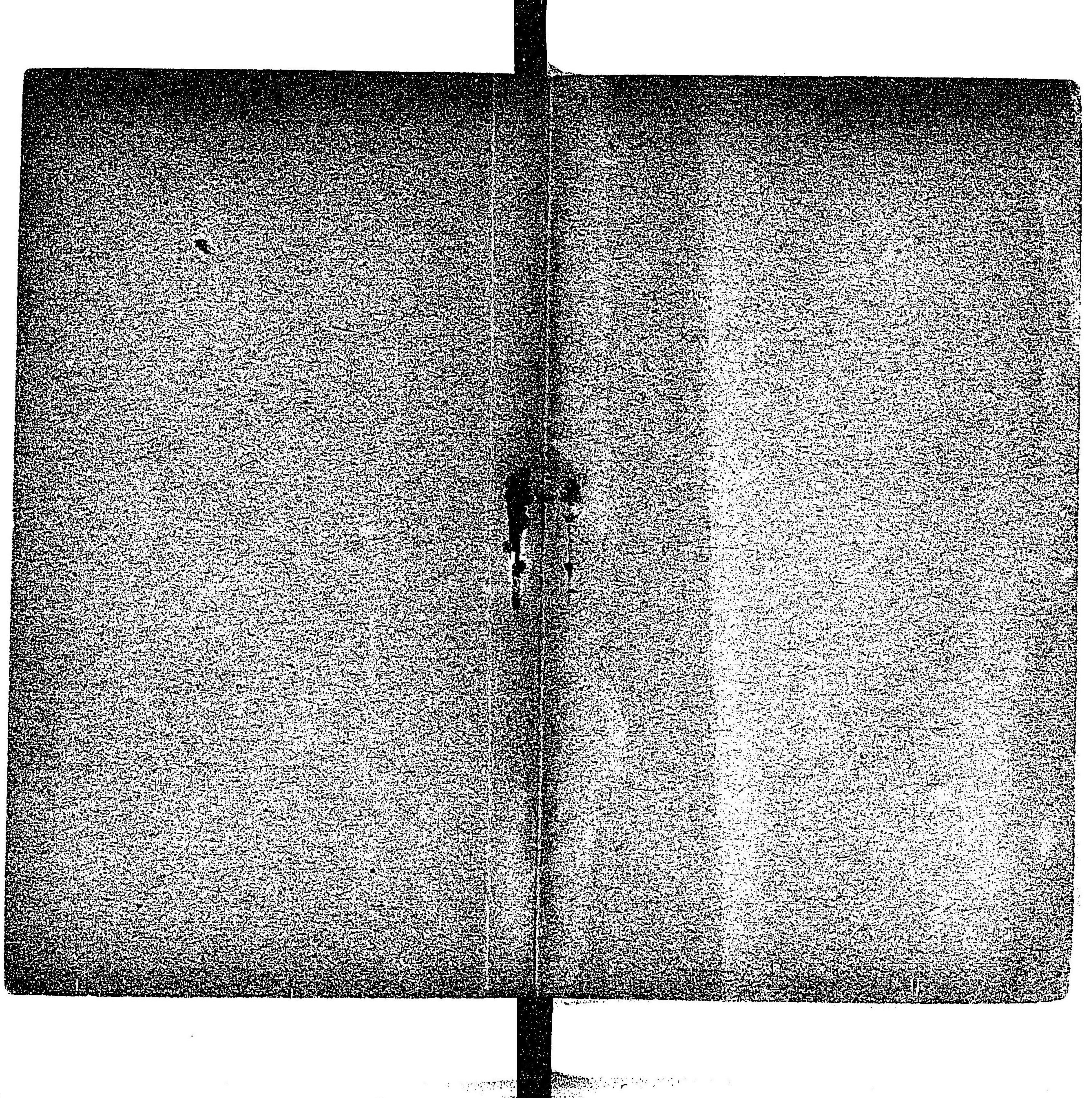
翠雨小史／編

M43

DBT-0275









特65

76



語大會





序

三遊亭故圓朝子の怪談牡丹燈籠。松林故伯圓子の安政三組盃など。一度速記刊行せられてより。頓に講談落語の流行を來たし。其讀者を有するの多きに至りては。彼の紅葉露伴の大才すら。尙且及ぶ能はずと稱せらる。蓋講談の古戦の状況を説き。近世の事情を談ずる。落語の能く人情を穿ち。滑稽人の願を解かしむるもの。皆通俗を旨とし。譬を近きに取り。婦女童幼にも能く解し易か





橋家藏



三遊亭橋家



三遊亭橋家

らしむるが爲なり。當今話術界の粹たる。三遊派。柳派。講談界以下に囁して。得意の讀物を蒐め。新落語大會と名く。固より僅々たる小冊子に過ぎずといへども。春風駘蕩の日。秋月影清きの夜。窓下に之れを緝けば。聊か以て消閑の具と爲すに足らむ。其上梓に當り一言を卷首に顯すにあむ。

明治四十三年

紅葉樓南庭に於て

翠雨小史識





橋家藏



三遊亭橋



三遊亭右

らしむるが爲なり。當今話術界の粹たる。三遊派。柳派。講談界以下に囁して。得意の讀物を蒐め。新落語大會と名く。固より僅々たる小冊子に過ぎずといへども。春風駘蕩の日。秋月影清きの夜。窓下に之を緝けば。聊か以て消閑の具と爲すに足らむ。其上梓に當り一言を卷首に題すに亦む。

明治四十三年

紅葉樓南庭に於て

翠雨小史 識







フボトケ  
新落語大會

目次

● 浦嶋うらしま

太郎たろう

三遊亭小圓遊

● 新刀しんとう

虎轍こてつ

田邊南麟

● 貸本屋かじほんや

の夢のゆめ

橘家圓喬

● 飲取りのみにとり

鎗やぶ

神田伯山



目次

- 三餅ち……………柳亭左樂
- 滑稽の花魁……………雷門助六
- 高田の馬場……………桃川燕玉

新落語大會目次終

新落語大會

▲浦島太郎

三遊亭圓遊口演  
小野田翠雨速記

さて今度辻本書店より、落語大全といふ御本の發行につきまして  
浦島太郎の落語を一席申し上げますこと、浦島といふは、三千年  
の壽命を保つたといふ、御話でございますから、鳥渡お祝ひの  
ために、申し上げますわけでありまして、然し我日本も、追々ど



開化ひがけてまゐりましたから、何事なにことも自由自在じゆういざいになりまして、明治めいじの浦島うらしまは、昔むかしのやうに龜かめの背中せなかへ乗のつて、海中かいちゆうを往ゆくなんどと、其そ様な香氣のんきな事ことはして居ゐません、陸りくには鐵道てつどう、空中くうちゆうは輕氣球けいききゅう、海上かいじやうならば汽船きせんの便べんを籍かりて、天國てんごくへでも、龍宮りゆうきゆうへでも往ゆかうといふ勢いちはひなのでございます爰こゝに横濱よこはま辨天べんてん通りに、浦島うらしま太郎たろうといふ方かたがありましたが、至いたつて旅行りょこう好ずきでありまして、諸所しよしょ方々はうく旅行りょこうのみして、樂たのしみとして居ゐられます、それに此方このかたは、平生へいぜいは仲々なか々なか堅かたい人で、御商賣ごしょうばいにも身みをいれて稼かせぎなさいます、西洋人せいやうじんども盛さかんに取引とりひきをして居ゐられますが、或時あるとき西洋人せいやうじんから、水中すいちゆうの玉たまといふ物ものを

買取かひとられました、此物このものは英語えいごでフレツデルヒースと申まをすさうで、尤なほも此英語このえいごは當あてにはなりません、二度ふたいふと變かはつて居ゐるといふ隨ずい分ぶん怪あやしい外國語ぐわいこくごです、恰當ちやうとうに正月しやうげつの事ことでございしますが、浦島うらしまさんの門口かどぐちから

男おとこへイ御免ごめん下さください

と入はいつてまゐるつたのは、た出入でいりの封間船たいこもちふなはち八はちといふ男おとこで

船ふねへイた目出度めでぞうでございます

浦うら「ヤ、これは誰たれかと思おもつたら、船ふね八はちさん、さア此方こゝちへた上うへり……た目出度めでぞう、さアもつと此方こゝちへた出いで、時ときにお前まへに話はなさう



開化てまゐりましたから、何事も自由自在になりまして、明治の浦島は、昔のやうに龜の背中へ乗つて、海中を往くなんどと、其様な呑氣な事はして居ません、陸には鐵道、空中は輕氣球、海上ならば汽船の便を籍りて、天國へでも、龍宮へでも往かうといふ勢ひなのでございます爰に横濱辨天通りに、浦島太郎といふ方がありましたが、至つて旅行好でありまして、諸所方々旅行のみして、樂として居られます、それに此方は、平生は仲々お堅い人で、御商賣にも身をいれて稼ぎなさいます、西洋人とも盛に取引をして居られますが、或時西洋人から、水中の玉といふ物を

買取られました、此物は英語でフレツデルヒースと申すさうで、尤も此英語は當にはなりません、二度いふと變つて居るといふ随分怪しい外國語です、恰當な正月の事でございますが、浦島さんの門口から  
男、へい御免下さい  
と入つてまゐつたのは、た出入の封筒船入といふ男で  
船へいた目出度でございます  
浦ヤ、これは誰かと思つたら、船八さん、さア此方へた上り……た目出度、さアもつと此方へた出で、時にお前に話さう



と思つて居たところだが、私が今度水中の玉といふ珍らしい物を買たが、此玉へ入ると水中の洋行が出来るんだが、鳥渡一時間許り水中の見物をして来やうと思ふが、一所に往かないか船「それは難有い、是非お供願ひたいので……然し家には、両親もあり噂も子供もありませんから、心配すると不可ませんが、其儘ブク〜になつて了ツちやア驚きますね

浦「羽虫だな、大丈夫だツてね事よ、此玉は今度西洋で、新發明になつた水中の玉といふ、自由自在の器械なんだ、空中を輕氣球が飛行くと同様だ、鳥渡一時間許り水中を見物して来るの

に、其様に心配には及ばない  
船「左様でげすか、其奴は難有い、デハ旦那一ツ氣を揃へて、是非に供をする事に致しませう

と是から兩人で、玉の口から空氣を入れて、兩人とも玉の中へ入りまして、海上へ浮みまして、風に吹かれて、凡そ海上一里も出たかと思ひまする時分に、ズーと器械を押しますると、其玉が水中へと潜りました、水の上とは氣候が餘程違ひまして、兩人共ヒヤリと致して、誠に好い心持だ  
「何うだい師匠、愉快ぢやアないか



船「た蔭さまで、大愉快でございます」

浦「ア御覽、師匠たそろしく魚が居るぢやアないか、ヤア大きな珊瑚樹が生れて居る、

船「ナール程、旦那好い景色ですな、ヤア旦那彼處に軍艦がゴロ

く轉がつて居ます、大方廿七八年の戦役の時に、沈没れた清

國のでせう、何うも海底は種々なものがありますな

浦「何うだいまア、彼處を見ねえ、河童が泳いで來らア、大層並

んで來るな

船「成程、河童の訓練だ、旦那六十四匹居ますせ

浦「何うして數が分つたんだ

船「カツバ六十四でせう

浦「ハ、ハ、成程違えねえ

といつて居るうちに、何時しか浪も遠ざかりまして、浪も何にも

ない砂場へ出ましたが、向ふを見ると、城の屋根が見えます、兩

人とも玉の中から出まして、此處は何てな所だらうと不思議に思

つて居ますと

鯛「モシ、貴方は、日本の人ではありませんか、私共は貴

方方を、お迎えに出ましたので、私は鯛の甘助と申します



河「手前は河童の引、申すものでござります

漢「私は鱗螺の壺藏と申します

蟹「手前は蟹の横造と申しまする者で……

浦「エ、一体此處は、何といふ國ですか

鯛「此處は龍宮界の肴町一丁目です、乙姫様が貴公方のた出でに

なるのを、疾うから御承知で、私共をた迎ひにた遣はしになり

ましたので……

浦「左様でござりますか、夫れでは御案内を願ひます

河「さア、此方へ、何ぞた出でなすつて下さいまし、此處は

肴町といふだけあつて、魚が皆店を出して商賣をして居ます

浦「へー成程彼處に、汁粉屋がありますな

鯛「彼處の主人はあんどうです

浦「汁粉屋の主人であんどうとは面白い、成程……其隣家は……

鯛「彼處は消防夫の頭の家で、彼の頭はとびの魚でござります

浦「成程……其隣家の黒い門のある家は……

鯛「彼は官員の家で、主人はなまづでござります

浦「へー成程……其向ふは……

鯛「彼は眞言宗のた寺で、た住持はほうぼう様でござります



浦「其隣家は大層立派な構ひですが、銀行ですか」

鯛「左様銀行です、頭取はぎんぼうと申します」

浦「隣家も、西洋造で仲々立派ですな」

鯛「彼は郵便局です、局長ははやと申しまして郵便配達人の名はよりといひます」

浦「へー奇体ですな、向ふに紺屋がありますな」

鯛「彼處の主人はあいなめです」

浦「其隣家は料理屋らしい家ですな」

鯛「彼家は龍宮界でも名高い料理店で、名前を蜃氣樓と云す」

浦「成程蜃氣樓は面白いね、彼處に見ゆる家は鳥渡小意氣に出来て居ますな」

鯛「彼は常磐津の師匠の家で、女主人をさがやたぼるとまうします」

浦「ナール程、洒落て居るね、其の向ふの角は誰かのた屋敷かね」

鯛「彼は以前外務大臣をなすつた、ひつさんの御屋敷です、かれ」

浦「(家来)も澤山居ります」

浦「へー道理で立派だと思つた、其一軒置いて隣りの家には、大」



層若衆が居るね

鯛「彼は車海老が、人力車宿を営業て居るので、親方は車海老で曳子は足長でなくして、手長海老です

浦「其隣りは……………」

鯛「彼はさめがかまぼこ屋を開いて居るのです

浦「財産家らしいね

鯛「ナニニ財産家どころか、搦手に寄らぬ貧乏で、始終はんぺん一枚で居ます

其内に龍宮の城門近くなります、と多くの魚類が出迎ひにまゐり

まして、門を入ると、石のズーと敷てある所を通つて、大廣間へ出ますと、や、何うも其立派なること驚くばかりでありまして、

正面には乙姫様が、一段高い所へ多くの侍女を連れて、た着座になり、其左右には多くの魚類が居並んで、山海の珍味といひたいが、山はないから、海にあるとあらゆるものをば、御馳走致されまして、兩人も大層悦びました、此時乙姫は

乙「さア折角の珍客であるから、何かた土産の品を差上げるよといふ聲が掛ると、やがて家來の魚共が、其所へ眞珠、枝珊瑚など海の産物を、山の如くに積重ました、兩人益々悦んで、飲めや



唄への大陽氣をやりまするうちに、一匹の正覺坊が、大層に酔拂つて、管を巻き始めました

正「ヤイ〜皆俺は正覺坊だよ、俺のいふ事を聴いてくんねえ、酒に酔つて、すすきたら事いふのではないが、俺だつてまゝくろになつて、一日稼ひで居るんだから、偶には酒をたらふく飲まねばならぬ、かにををてせといふだらうが、此所をにしんどあんこうして、貰えてき、ぶらな事はいはねえ積りだ、ノウいか……………」

いか「ちうよく、俺に踊らしてくんねえ

正「何を踊るんだ、まア何てえ踊りだ

いか「なまここにや手もない足もない何故かいかには八つある、ヤレコレサノコレラコレラ

正「ハ、、、いかだけにコレラ〜といつてやがる

大陽氣、底抜け騒ぎをやつて居ます、兩人は

船「若旦那驚きましたな、此騒ぎは……………」

浦「皆が泥酔つて居るうちに逃出せ、玉手箱を分捕れ

船「心得ました

二人は、ドン〜〜逃げました、船八は玉手箱を擔いで居ます



が、途中で重くて不可ませんから、一ト息休みました。

船「旦那、開けて見ませうか」

浦「開けて見ろく」

蓋を取ると、中から一道の白き烟がス——と立登つたかと思ふと  
兩人とも急に白髪はくはつの老人らうじんとなつて了しまひました、所ところが跡あとから大勢追  
ひかけてくるやうでありますから

船「若旦那、跡あとから魚さかなが追掛おつかけて、来るやうです」

魚「モシく、貴公あなた方は日本國にほんこくからた出でになつたお方ではあ  
りませんか

兩人「イ、エ私共は、其様なものぢやアありません  
魚「左様ですか、失禮……………」

往いつて了しまひました、全く此まづは二人とも白髪ひらがになつたものですから、  
魚さかなの方ほうで見違まちがひたのであります

船「若旦那、今の内に早く逃にげませう、ヤア彼處あそこに蓬來そうらいの龜かめが居  
る、彼の龜かめに日本にほんへ送おくつて貰もらひませう、水中すゐちゆうの玉たまへ入はいつてはモ  
ッ日本にほんへ歸かへる方角ほうかくが分わからないから……………オイ龜かめ……………龜かめさん送おくつてく  
れないか

龜「何なにうか私わたしの背中せなかへ、お乗のんなすつて下くださ



二人との龜の背中へ乗りますと、龜は水煙りを立てて、サツ／＼

くと泳いで居るかと思ふうちに、忽ち横濱へ着きまして、若旦那はた宅へお歸りになりますと、一同は大悦びで

父「番頭や、珍らしく悴が歸宅をいたしましたよ

浦「親父さん 鳥渡一時間旅行を致してまゐりました

父「申戯をたいたい、鳥渡一時間どころか、お前が往つてから

モウ三十四五年になります、私は百歳婆は九十九になりました

よ、唄にもお前百まで私や九十九までといふ事があらア

浦「是れは恐入りました

父「悴お前はモウ六十になるわけだ、頭も其通り白髪になつて居るぢやアないか、お前の女房が五十四に、モウなる、孫にも疾うに嫁を取りました

浦「へ、鳥渡一時間と思ひましたに、玉手箱を開たばツかりで

少間は三十五年も年を老りましたかな……

父「私夫婦に悴夫婦孫夫婦、三夫婦揃ふては、誠に目出度……

此れも悴が年の功で歸つて来てくれたからだ

浦「イ、エ私は龜の甲で歸つてまゐりました

(完)



▲新刀虎轍傳

上の巻

田邊南麟講演  
小野田翠雨速記

エ、新刀の正宗と稱はれまする、長曾根虎轍沖里入道の履歴を申  
上げます、古刀には随分名高い達人がございませすが、新刀には至  
ッて少なうございませす、新刀で名高のが津田越前守祐廣、肥前守  
忠義、井上入道新海、長曾根虎轍先づ此四人でありまして、郷義  
弘といふ名人もありませんが、此人の鍛えた刀は至ッて少ない、去

れば昔の言葉に「義弘の刀とお化は見たことがない」と傳説へて  
あります、尤も此人は十八歳にて名人の群に入り、二十二才にし  
て朋輩より藝の遺恨によッて憤怒を受け、小夜の中山で、谷から  
突落され、終に敢なき最後を遂げました、刀の数の少ないのも無  
理はありません、さて此虎轍といふ人は、元からの刀鍛冶ではあ  
りません、以前は鎧鍛冶でありまして、仔細あッて一朝志しを  
翻ねし、刀劔を鍛つことを學び、終に名譽の新刀鍛冶とはなりま  
したが、すべて物には抑揚波瀾がなければならん、又人間は憤る  
といふ事がなければならぬ、失敗といふものもなければならぬ、



發憤といふこと、失敗といふことは、他日の成効を期するの根本  
 でありまして、彼の韓信といふ名將は、漂母に食を恵まれ、他の  
 股を潜るといふ恥辱を受けたが、後には漢の高祖のために大功を  
 奏した、塙保巳一といふ盲目の大學者は、或時一部の小冊子を綴  
 ッて、時の老中堀田越前守に見せたスルと堀田様が、斯様な書物  
 が何になるものか、盲目の癖に何が出来るかと辱しめた時に、保巳  
 一大いに怒ッて、其場を退り、尙一層の奮發を起して、群書類從  
 三百六十巻を編み、後世に其名を残しました、シテ見ると人間は  
 一寸したことから奮發をいたしますもので、爰に加賀國石川郡金

澤城主、前田加賀守菅原利行朝臣の家來に、三百石を領する鎧  
 鍛冶、長曾根新兵衛冲高といへるものあり、其忬の冲里は、幼名  
 を虎次郎と申し、幼少の頃から父に従ッて鎧を鍛ふことを學んで  
 ありましたが、二十一才の時、父冲高は病死を遂げ、其後三百石  
 を領して相變らず、父の遺業を繼いで、鎧を鍛へ、殿へ忠勤を勵  
 げんで居りました、廿五歳の時に至ッて、其業益々進み、前田百  
 萬石の一家中でも、虎次郎を導み、彼の鎧を以てすれば、如何な  
 る鎧刀でも、裏を欠く事は更にない年は若いが當代の名人である  
 と、譽めものとなッて居りました、母が一人あッて、此に誠に能



く仕る、三千の罪不孝より大いなるはなし、親に孝を竭すくらゐ  
なものは、名を後世に残します、然るに慶長十九年六月の事であ  
りますが、

○「長曾根氏居らざるか」

と表の方より入り来りましたは、これを同藩番頭役を勤むる、篠  
原頼母といふ、虎次郎とは無二の朋友であります、

虎「これは篠原氏、能うこそその御入來、先づ〜此處へお通り下  
さすまし

頼「イヤ今日は悠然として居られぬ、少しく據ない事があッ

て参ったといふ其用向きは、外ではない、今日お身のために朋  
友大勢と物いひを致して参った、といふは御身は、父新兵衛冲  
高に勝った腕前であることは、兼て一藩中の評判であつたが、  
近頃に至り、虎次郎は名人かは知らんけれども、父新兵衛より  
は大いに劣つて居る、困つた者ぢや、名人に二代はないもので  
弟子は師の半分に及ばずといふが、夫れに違ひないといふ評判  
今日もそれから話頭が起つて、態々忠告に参つたが、モウ少し  
勵まれては如何である

虎次郎は之れを聽いて



虎、難有う存じます、仰せ辱はなはれども、そもく私に父に劣るといふは、如何なる理由でございませう、高言には似たれども手前は、父には劣らぬ積りであります

頼「イヤ、其所だテ、た身も薄々は聴いたであらうが、當時上方表から當金澤に參つて、一番の若侍が、盡く賞美をいたして居る、刀劍鍛冶、文珠五郎兼次といふものは、至つて切味好く、今貞宗といふ評判、此身が打ちたる鎧などは、到底五郎兼次の鍛えた刀には及ばん、瓜か茄子の如くに切れるといふ評判だ、彼れ兼次も自ら稱いふて居るために、手を叩いて皆一同が

笑ふて居るそれを聴くにつけても、拙者と貴殿とは竹馬の友であるから、餘り好い心持はせんが、何と文珠五郎の刀をもつてするども、裏欠くことのないやうなる腕前を現はしてはくれんか

虎次郎カラ〜と打笑ツて

虎「篠原氏のお心添へ、誠に千萬辱けなう存じます、文珠五郎兼次は、今貞宗といはれて居る名人かは知らざれども、斯くいふ長會根も天下の名人でございませう、頼「それが宜くないといふことよ、自分から名人と極めて仕舞ツ



て居るから、ツイ鎧が裏欠くやうな物が出来て了ふのだ  
虎「イエ決して左様なことはございませぬ、仰せに従つて、此よ  
り鍛上げるところの鎧は、文珠五郎の如き刀を以て、裏欠くと  
の出来ざるやうに出来へて御覽に入れます  
頼「ウム、ね手前は、それを眞實にいふのか、申戯にいふの  
か、戯ではござるまいな

虎「某愚なりといへども、自分の腕前に關はることについて、  
決して貴郎方に、戯れは申しません、眞以て申すことでござい  
ますから、貴郎方の方に於て、戯れとれ聽き下すツては迷惑を

仕る

頼「それは何うも辱けない、左わらば斯うしやう、其方の鎧が出  
来たなら、其鎧と文珠五郎の刀と、殿の御前に於て、試合を願  
つたら如何なものだ、其試合にさへ打勝ては、今までの噂こわ  
さは、旭の霜と等しく、消去つて了ふであらう

虎「面白う仰せでござります、武藝の試合といふは、今まで數ぞ  
ござります、鎧と刀の腕前を現はす試合と申すは、實で聽いた  
ことがございませぬ、如何承知致しました、殿の御前に於て、  
立派に負すやうなる鎧を出来て、御覽に入れますら



と受合ッた

頼「首尾しゆびよう出来しゆたうの上うへは、我方わががたまで知らせてくれよ  
と篠原頼母しのはらのちかといふ方は、呉れくも言置いひおいて、立歸たちかえりましてご  
ざいます、さア是れより長曾根虎次郎ながそねとらぢらうは、一生懸命しよちゆけんめい 晝夜寢食ちややしんじよくを  
忘れわましたることにて、様々さまさまの工夫くふうをして、鎧よろひを一領仕立いちりやうしたてあげん  
と、苦しんで居をりましたが、或夜あるよの事こと、母親ははおやのお美代みよといふが、  
虎こらうぢ 郎らうぢを傍そばへ呼びよびまして、

母ははとて汝なんぢは、過日くわじつ篠原様しのはらさまた出いでになつて、兼次かねつぐの刀かたなと鎧よろひとの勝  
負かを、近々きんきん上かみへ願ねがひをあげるといふことであるが、確しかと兼次かねつぐに

勝かてるだけの鎧よろひを拵こしらへるや如何いかに……若出来もししゆたうの上うへ、文珠ぶんじゆ五郎ごらうの  
刀かたなに敗ひを取るやうなことでもありしなば、汝なんぢが父新兵衛ちちへい冲高殿おきたかどの  
には不孝ふかう此上このうへもなく、又今日またこんにち斯かくの如ごとく安穩あんゑんに送おくり居をる、主君しゆくんへ  
對たいして、恥辱ちじよくを興あた 奉たてまつるやうなものである、何れいかんにしても、  
父新兵衛ちちへい冲高殿おきたかどのが、泉下せんかに泣なきたまふこと如何いかばかりか、苟いやしく  
も汝なんぢの心こころに及およばざることありと認みとむるくらゐなれば、早はやく今いまの  
内頼母殿うちたのもひのにお詫わび申まして、中止ちゆうしせよ、何れいかんにても確しかとしたる返へん  
答致こたへせ

と流石さすがは冲高おきたかの妻つまだけありまして、仲々なかの女丈夫ぢよじよらうぢ、冲高おきたか死去しきよの後のち



は、冲里を監督して其業に勵むやう常に教訓いたして居るくらゐ  
でありますから、キツパリと問ひました時に、虎次郎冲里莞爾と  
して打笑ひ

虎「陽氣の發する所、金石も亦徹る、精神一到何事か成らざらん、  
母人必ず其御心配なら御無用でござる、今般私が仕立掛り  
ました鎧の儀に於ては、文珠五郎の刀をもつて、裏欠かざるは  
勿論、先方の刀に齒こぼれの出来るや受合ひまする、冲里が一  
心鎧の内に籠り居りなすれば、何ぞ文珠の如き鈍刀に劣りませ  
うや

母「オ、好ういふたり、其一言を聽いて、母は安堵いたした、燒  
野の雉子夜の鶴、好きが上にも好くしたいと、思へばこそ斯様  
なことをいふのである、悪しく思ふて下さるなよ  
虎「勿体ない其仰せ、然し油断大敵と申せば、尙此上にも念を入  
れて、美事なるものを拵ぬまする

と其場を退りて、又トンカチン、チン／＼カチンと鎧の鍔に餘念  
もない、母は其音を聽いて、

母「一心籠めたる槌の音と見ぬ、平生の響きとは違ふやうではあ  
るけれども、何となく心掛りの事である、せめては神佛の加護



を受けて、美事に勝負に勝てるやういたしてやらうか

と是れからといふものは、母親お美代、七日七夜といふ其間京都の稻荷山の五社大明神、加賀の白山大権現を祈り、

母「仰卒して悴の鍛いたる鎧、今貞宗とまでいはれる文球五郎兼次が鍛ひたる刀と戦ひ、勝を占めまするやうに、神護を垂れたまへ

と短夜三更に八百萬神に祈り、一方ならぬ苦心をいたしまして

ございませが、さて虎次郎の鎧は、十五日程を経まして出来し自ら篠原頼母方へ来て、

虎「さて篠原氏、兼てのれ約束通り、鎧は漸く打上げましてござ

いませが、何卒五郎兼次の刀と、私の鎧と戦ひを願ひたう存じます、此儀を上へね願ひ下し置かれるやうに……

とありますから、

頼「如何にも承知いたしたり

と頼母が自分で願書を認ためて、大守前田中納言殿へ願ひを立てました、中納言大いに悦びたまひ、家老重役を召集めて

殿「宜しく取計へ、予も見物いたすであらうと仰せがある



一同「畏より奉る」

と重役相談の上、場所は加州城大廣間庭前といふことに極つて、  
双方へ御沙汰が下りました、文珠五郎書面を披いて見ると

明三日金澤城大廣間庭前に於て其方の鍛わたる刀と長曾根冲里  
の鍛わたる鎧を以て勝負申付け候條四ツ時までには相違なく出頭  
可致候也

とございます、文珠五郎ハタと膝を打つて

文「さては兼て吾冲里を悪しざまにいひ居りしが、いつしか彼の  
耳に入つて、我鼻を挫がんだめに斯ることを願つたりと相見ぬ

た、ヨシ／＼高の知れたる長曾根の鎧、其覺悟にて鍛つたる刀  
にあらすとも、何條何程のことやあらん、却つて我が出世なす  
べき時節の到來せしなり、アラ悦ばしや

と元來高慢の男故、一も二もなく承諾をして、翌朝は出頭する心  
組で居りました、さて早くも其日は暮れまして、明くれば三日、  
虎次郎冲里は、身装ひをして、朝飯などを濟め、出て往かんとし  
たが、母がまだ起きざるに依つて、一應斷つて往かんと、母の臥  
床へ來つて

虎「母上、唯今私は登城をいたします、今日こそは、兼ての願通



り、鎧と刀の試合の當日、若私彼に打負けましたれば、手前は五郎兼次と差違へて相果てまする心得にございますれば、何分母人後々の處を願まする

といひましたが、臥床の内より何の回答もありません、コハ不思議なりと虎次郎、襖を押明け、屏風を排いて見ますれば、コハソモ如何に母は、紅に染んで既に締切れて居ります、大いに驚いて孝心無二の冲里は、母の死骸に縋り付き

虎「母人よく何故あつての御自害……………」

と呼べと叫けべと亡き魂の、今宵は何處に宿るらん、藻抜けの空

やうつ蟬の、應へともあられれば、冲里は茫然として腕拱ぬき為さん術もなかりしが、良あつて涙を拂ひ、フト傍を打見やれば、

一通の遺書あり、封とくく讀下せば

一筆書残しり、其方は父の遺業を享けて能く鎧鍛冶の本分を

守り家業に精出し候義は常に感服いたし居候就いては此度其方

の鍛ひ候鎧の義は妾が死を以て一心を籠め置き候間譬へ相手が

今貞宗の稱ある文珠兼次にもせよ勝負に打勝ち候事必條なり去

りながら鎧は陰にして刀は陽に候陰を以て陽に争ふは臣が君に

争ふの道理なれば此度の勝負は物の道理に逆つたる次第ゆゑに



今日の勝負相済み候上は此國を去つて鎧師を止めよ而して能き師を撰み刀鍛治となつて後世に名を擧げよ其方が鎧鍛治の心を刀劔に移し刀鍛治となれば日本に隨一の名譽を顯すべしくれぐれも母が申残し候事ゆめ違ふべからず永らく孝道を竭しくれたる段冥土に至つて父に語り共に出世を祈り申さん死出の旅路を急ぐため惜しき筆をも止め申候

あらく かしく

美代

虎次郎殿

此書面を見たる虎次郎冲里に於ては、死骸の前へ兩手を突へて、ハラ／＼と落涙に及び

虎「お情け厚き御教訓を蒙り、いつの世にか忘れ申さん、仰せに従がひ、今日の事済みますれば、此國を去つて、刀鍛治となり申さん

と泣く／＼母の死骸をば、家人の者に相頼みまして、未だ表向きにはいたしません、兎も角も今日の試合に後れなば、母の存意にも負く次第と、涙を拂つて金澤城へ出仕いたしました。



下の巻

さて當日は中納言殿を始め、家老重臣綺羅星の如く居並び、庭前には彼の虎次郎冲里が鍛えたる甲冑を据えて冲里は扣へたり、所へ向ふの幕を拂つて、立出でましたは、當時一番中に其名高き文珠五郎兼次、己れの鍛ひたる一刀を持つて、進んだり、篠原頼母は片唾を飲んで控ゆる居りましたが、殿の命を受けて、兩人を御前近くへ召しました、中納言御聲朗かに

殿「ゴリヤ虎次郎、五郎、武藝に武藝の試合は數多く見聞せしが、鎧刀の優劣を争ふ試合は、實珍らしき事にてある、何れが負け

何れが勝ち候とも後日の怨悪必ず無用であるぞ、

兩人「ハ、ア有難き御沙汰を蒙り、臣等涕泣の至りに存じ奉る

と禮を申上げて左右へ別れ、虎次郎は鎧を後から斯う撫でて居り

ます、前へ廻つた兼次が覺ゆるの一刀ヒラリと引抜き

五「アイヤ長曾根氏、御身我刀にては其鎧裏欠くまじと思ふてか

今日の願意、實に片腹痛く存ずる、若美事其鎧にして裏欠かば、

以來鎧師を止めて我門人となり、刀劍師とはなりたまへ

と傍若無人の一言、虎次郎冲里は、血氣熾んの若者なれば、クワ

ツとばかりに怒りを發し



虎「黙り候へ、文珠氏、御身の鍛った鈍刀にて、何ぞや我鎧の裏  
欠くことを得べけんや、一般普通の鎧師が鍛ひたる鎧にあらす  
天下の名人、冲里が正に鍛ひし品なれば、齒の立つべき道理  
はなし、

五「オ、能くもいはたりな、裏欠かば如何いたす

虎「我鎧にして裏欠かば御身の門下に屬して、刀學はん若又御身  
の刀にして、齒こばれ等出來たる節は、我の門下になりて、鎧  
を學びたまへ

五「コハ面白し……………

虎「論は無益イザ……………

五「心得たり

と兼次は、一步後の方へ退き、視ひを定めて打下さんといたしま  
した、時に虎次郎は大音なわけ

虎「ヤア、文珠兼次、未だ呼吸が足らざるぞ、今一層の精神入  
るゝにあらざれば、到底齒は立つべからず

文珠激して

五「黙り居らう、

といひながら



五「ヤツ

一聲叫んで打下しました、鎧は眞二つになつたであらうと思ひの外、金の鈴を振る如き美しき音を發して、刀を弾き返せしました、兼次心中に失策ツたりと思ひながら、再び刀を振上げて、打下さんどしましたから、検査役家老前田主膳、傍らより聲をかけた主「ヤヨ、兼次、勝負は一度限りのもの、二の太刀下すは卑怯であらう

鶴のト聲

兼「ハツ

と答へて後へ下りました、主膳近くに立寄ツて、先づ虎次郎の鎧を改めて見ると、鴉の毛で突た程の痕もない、兼次の刀を改めて見ると、二三ヶ所の齒こぼれがありました、此事を殿の御前へ披露をしましたから、殿を始め一同の方々、アツといつて沖里の腕前に感服なさいました、下座に扣ぬた若者は、吾を忘すれて、手を叩いて歎賞に及ぶ、兼次は赤面して差俯向いて居りました、殿様は、沖里を御前近くへ召し

殿「コリヤ虎次郎、今日の鎧と劔の試合、天晴である、其方が平生の奮發、左こそと思はる、實に當代の名人なり



と御賞美の上、お盃を賜りました。

虎 君恩の程有難き仕合せに存じ奉りまする。

と嘻涙を流して、我家へ立歸りなりましたが、母の死去さへなかり

しせば、如何ばかり嬉しき事であらうかと、悲嘆の涙と嬉し涙

虎「ア、——悲喜交う至るとは、此事か、テモさても儘ならぬ

世の中や

漸くに氣を取直し、又始めて母の死を一家親類に知らせ、且た

上へも届けて、野邊の送りは法の如く済ませました、七日くの

供養も怠りなく、四十九日となりました、時に虎次郎一家を集め

て

虎「さて各々様、今般思ふ仔細あつて、私は諸國遍歴の上、今

一ト修業いたしたいと存じます、何卒御承知に預りたい

と發言した時、皆親類は驚きました、

甲「莫大の御扶持を上より頂いて、先頃より一層お覺え目出度身

の上が、何の不足あつて、修業には出られるや、此國に止つて

君に忠義を竭して居たら好いではないかと止めました

虎「イヤ、左にあらす、此度御前体にて、文珠五郎兼次と勝

負をしたは、争でか吾の力にあらん、太刀を持つて鎧を切らば



、少なくとも裏欠かぬまでも、痕ぐらゐるは附くべきに、左はな  
 して、却ッて勝を得たるは、母が一心を籠めたる庇陰、其母の  
 遺言によれば、此國に止まるは本意にわらず、母の遺言を守ッ  
 て、此地を立退くのでござれば、各々方必ず打止め下さるな  
 どいはれて一同道理の事なりと承知をいたしました、其所で翌日  
 お暇願ひを出いたしました、然るに殿様が何うしてもた許しがな  
 い、其他の重役に於かせられても、虎次郎に暇を出すことを不  
 承知を唱へまして

甲「畢竟文珠五郎兼次なるものがあるから左様な事を申すので

あらう、彼に暇を遣はすから當家に止まれ  
 とまで仰せを蒙りました、

虎「イエー、決して左様な卑怯な心底ではございせんが、切  
 望な暇を……………」

といッたがた聴入れがない、據なく長會根沖里、意を決して、家  
 財道具は其儘にして、金澤の城内を逐電いたしました、加州家で  
 は大騒ぎ、何れへ往ッたであらうか、盡くの御心配、虎次郎  
 は、大功は細瑾を省みずといふ心得で、住馴れたる石川郡を後に  
 なし、時は慶長十九年、七月の下旬、心細くもトボくと、生れ



出でにし故郷かと、思へば名残の惜まれて、跡に心も能琴村、操を替へぬ松竹や、やがての末は名取川、美川招きし事ならねど、旅路は淋しきものなれば、母の事ども思出で、心も最と動橋、君の情けも大聖寺、三日路過ぎて言問へば、早くも来ぬる北の庄、此所は名に負ふ勝家が、滅びし所と思ひ出でさすが、昔の忍ばれて、矢竹心の一ト雫、折しも降出す夏時雨、三國ヶ嶽の頂きも、霧に隠るゝ有耶無耶の中に疋田も後にしつ、来りし所は近江の琵琶湖、志す地は都なりと、終に西京へ着しまして、當時名高き粟田口近江守一竿齊忠綱といふ人の門に入り、母の遺言を守つて、

刀劔鍛治となり、其鍛えたる刀は、岩をも徹し虎をも徹すといふ世の好評を得まして、名を虎轍と改めよと、師の忠綱より命せられ、世の人虎轍の刀劔を尊むこと大方ならず、老年に及んで、長曾根沖里入道虎轍と自ら名乗ました、唯今でも、新刀ながら虎轍のものなら、二三百金はいたしませうか、兎も角も刀劔中興の名人、虎轍が鍛冶を廢して、名譽の刀劔鍛治となりましたは、斯ういふ次第でござります。

(完)



滑稽花魁買

雷門助六 口演  
小野田翠雨 速記

エ、能く我社會が申上げます通兎角此世の中はお色氣で持つて居りまして、一寸お女郎買にお出なすつても、皆様方のやうに男が好くつて様子がよくつて金離れがいゝと来て、アノ衣服を買つてたくんなど云ふと、さうか大丸がよからう、アノ一寸祝儀をやつておくんなさいましたな、と云ふと、總花でよからう、なんかんてこんな寸法とくるから、どんな、花魁もポーと來ますな、惚れ

るに極つて居ます、處が色が眞黒で痘痕があつて鼻でツたら、危坐ならいゝんですが、ねんねして居る工合は、掃溜に捨てゝある鮪の頭の様で目は山の手の井戸のやうに、ポイント引込んでイヤに奥深く、それで口が臭て、腋臭が有て、おまけに鮫肌ときてゴリくする様な身体で、蒲團の上で轉がる、ゴリく木綿が破れるときちやあ、どんな花魁でもてこずりますんで、  
妓夫喜助「花魁へ先刻から彼方のお客がお待なさいますが花魁がた出なさいないど、私が困りますから、ちよつと顔を出してねくんないまし



花魁「なんだね妻一人居るんぢやないやね、お客様が、たるでなさるよ御挨拶をおしな

喜「これは何うも御免下さいナニ鳥渡十分か廿分許り、お顔を出して下さりやめ、いゝんで……」

花「いやだよた前あんな痘痕面の色黒の處へ、誰が往もんかね、た前花魁は病氣でございますと云つて、断つておいでな」

喜「困りますな、然うするとあんなデレ助だから、そんなら花魁の病室へ案内しる病院でも宜い、己ア見舞に往くなんかと云はれますと、私まことに困りますな

花「れ前は本當に働きがないね、そんなら花魁は死んで仕舞ましたと断つておいでな

喜「いよく困りますな、そんなに早く死ぬもんですか、此間来た時は、ピン〜して居た癖に……」

花「ッ！此間死にましたとお云な、何でも構はないやね、妻やね、身体を三年の年季に入れたがね、命まで入れやしないよ、本當にあんな奴の傍へ往くと妻や命が縮まらアね、貴君がちつとも來ないもんだから、死んで仕舞ましたとお云な、何ぼ何んでも、死んだものを掘出て見ようとは云やアしまい



喜「そんなら虎烈拉か何かで……」

花「いやだね、コレラ病なんざア聞のもいやだよ、何か他の病氣  
喜「夫なら梅毒」

花「いやだよお前の云のはみんな汚ない病氣だね」

喜「夫なら血の道で」

花「馬鹿な云な血の道でそんなに早く死にやしないやね」

喜「じゃア脚氣で……」

花「兎角いやな病氣だね、そんなんなら和郎に戀煩ひして亡なり  
ましたとかお云な……お前先生の相客を甘く歸して呉れりや

ア、此客から御祝儀を戴いて上るよ

喜「イヤ惠來御祝儀を頂戴とさちやア、何とかやらなきやアなり  
ませんな、おゐらん、先方の御客は醜男子ですな、甘い！戀  
煩たア誰も氣がつかまませんな、へ、夫れじやねらん誤魔化  
して來やす

花「かへしておゐでよ屹度御祝儀は貰つて上るから……」

喜「助はやがて今一人のね客の處へ參ると」

客「やア誰かアと思つたら喜助どんか、さアくしんべいせず  
此方へ這入て蒲團の上へ上らつじやれ」



喜御珍しうござります、久しく入ッしやらんで……  
 客夫エ前様に云はれちやア、私誠に濟ねえが、己ア娘子の  
 事ア忘れた事アねエがなア、あれからチユウものは、己アが村  
 ても、色々な事があつてなア、追々麥の刈込みチユウで忙がし  
 かつたから、其内に村長の選挙だアと云てなア、己らが村中か  
 ら選挙されたアのだアと思ひなせへ處がなア己の學問がねへか  
 ら、人中へ出で恥さア掻くべいといかんチユウから、村の空左  
 衛門へたの頼んだがなア、其内に又隣村の親族共の息子がなア  
 嫁取るチユウんだが、いくら隣村だあと云つて黙つて居る譯

にもいかんもんだチユウし己ア仲人に頼まれたあんで行居つ  
 たがなア、其内來べい〜と思つて丸一年來ねエがな、誠に御  
 無沙汰してすまんねエ

喜何に然んなに長い話しを、お聞き申しに來たんじやござい  
 ませんが、私は貴郎の先刻入のしやつた時にね顔をみるとホロリ  
 ツと涙を流しましたが……何時ぞや貴方がお歸りの時三十圓  
 と云ふた金を花魁にね小遣ひにおやり遊して貴方が車へでも乗  
 つてお歸りになさればいゝのに……花魁が貴郎の跡をシートと  
 見てた出でしたが、梯子へ上る時ヂツと私の手を握ッて、喜助



や本當に様子のいゝ旦那だね、己アもう惚たアなアと、貴郎の假聲まで遣つてへへへ、夫程までには思なさつたんですが、貴郎があれツ切お出がないもんですから夫からと申すものは、ブラ〜病胸隔が閉つて骨と皮ばかりになつて始終和郎の事は、フかり云て居ましたが、當家の寮が橋場にあるんで其處へ養生に入つしつたんですが、夫はもう〜貴郎の事はかり其内だん〜お寢れなさるもんですから、主人も心配しましてな彼處の醫者此處の醫者と、いろ〜取換へて見ましたが、ろく〜た薬を上らないもんですから、だん〜に鼻が落て、肉が減てき

て、何でもた醫者が云には花魁は戀煩かなんかだらうから薬を呑んでも利くまいと申されて……私が始終看病に附て居ますから心配いたして花魁の顔を見る度に南無不動明王何卒たゐらんの病氣の癒る様に、のうまくさんまんだアなアあばきやア、と祈つて居たんですが、ツイ此間夜の十二時頃花魁が私をおよびなすつてコレ喜助や、外に誰も居ないか聞えると悪いから……と云ひますから花魁確乎なさいまし、私と花魁との外には誰も居やしません、氣を確かりなさいましと云たら花魁が私の顔をヂツと見て恨めしさうにア、妾は死んでもいゝが一言アノ



方に云ひたいよ、アノ御方は御様子がいゝから、キット外に好  
女でも出来て私がかんなに思つても、一度もれ出がないんだら  
う、ア、口惜しい妾ア死んでも、魂魄此土に止まらつて、恨を  
晴さで置くべきか……こんな様な譯ですから何卒今夜は  
直にお歸りを願いますへへへ

客「アッ驚いたア馬鹿げた事をいふもんでねへ、明治の今日に  
魂魄此土に止つてなんて、ソナ馬鹿げた事ア云ふもんでねへ  
ウ、ウ、(是より泣聲にて) 戀煩なんて……己アの事を思つ  
て死んだつて可愛さうに……併しあまつ子もあまつ子だ然う、

云ふ譯なら、不便の世の中じゃあめんえし一寸其譯イ書て葛西  
新田の田五左衛門様で端書を一本よこしやア直ぐに來たあもの  
ウ、死際に一言云いてエなんて……己ア浮氣して久しく來ねん  
ぢやねエぞ、全く先刻云つた通りの事でフウーン〜 (泣聲)  
これあまア堪忍して呉れ、可愛さうに……

喜「然ういふ譯ですから、正可に掘出して見る事も出来すまい  
から、今日は此儘御歸りを願います  
客「ハア詰らんでかす、馬鹿げた事ですが、己ア肥桶の尻叩いて  
踊りを跳つた事アあるでかすが未だ念佛一つ云つたア事あない



かす何たる事ですが、人間チユウものは、誠に果敢ないも  
 かす、あまツ子もあまツ子だ己が浮氣でもするチユウでな  
 るに、魂魄此土に止まつて何て、おツかねへ、己アをそんなに  
 様子のいくなんて、夫程までに思ふチユウなら、先刻云ふ通り  
 郵便でもよこせばいいに……ハア誠に詰らん事ですが、己ア  
 ハアもう女郎買はしましねエ、決して女の膚へは觸れません、  
 ハア誠に詰らんねエ事ですが、己ア切角此處迄来たもんだから  
 墓参りをして往きませう喜助どんお前寺のウ教へてくれエのウ  
 喜アツエ、何うも御親切様恐れ入りますへ、（此時喜助如

何せんといふ風にて）誠にどうも早や誠にどうも……へんく  
 主人も申すには、大切な右金を掛けた花魁で、貴郎の爲めに没  
 りましたんですから、アノれ方がれ出になつたら、寺参り位は  
 ……へ、何うも私の一存では、お伴をする譯にも参りませ  
 んから、一寸主人に申し聞て  
 客早く聞て来てくれ  
 喜助は立上つて慌忙しく花魁の室へ驅込みまして  
 喜たしく花魁たし大變で……どんでもないとに成て仕舞いました  
 花だねエ好都合にいつたのかへ



喜好都合往つた處じやない、私が甘く花魁が和郎、御様子ごようすのい  
 しのに惚込んで、戀煩こひづらひでどうく没なくなりましたと云つた時は甘  
 く彼奴きやつが乗つて仕舞つて、きやあく泣出なきたした顔の、可笑おかしの、  
 可笑おかしくないのじやない、喜わたしや可笑おかしのを堪こらへて、ポロリト涙なみだ  
 を流ながして泣なて居ゐた時の、苦くるしい苦くるくないのつて………一圓助位いちげんすけくら  
 の價値ねちは確たしかにあるんで、處どころがね花魁おいらん、己おら折角せつかく來たもんだか  
 ら、墓はかま參りをして行くつて云ふには困りやした、斯かしふ云ふ事ことな  
 ら前まへに一寸ちよと、小な墓ちいさなでも立たつて置おけばよかつたにへくく一体花魁たいおいらん  
 に惚ほれて居ゐるから墓はかま參りなんてエ事ことになるんだから、花魁一寸おいらんちよと

幽靈おうれいか何かで一寸行つて下くださいな  
 花はないやな事を云ふね、妾わたしは如何いかしても、あんな男をとこの處ところへは行か  
 ないよ、いやだからさ、お前一寸何處まへちよとどこのた寺てらへ連れて来こいでな  
 、藏前くらまへや山谷さんやの近時きんじよにはた寺てらが矢鱈やたらにあるからね、何處どこのた寺てら  
 へか連つれて御出おいでな、然そうしてね新あたらしい墓はかを見みつけて、これが花  
 魁くらんのお墓はかでございとか何なんとか、誤魔化ごまくわして歸かへしてね仕舞まひな、  
 そうすりや、屹度きつと御祝儀ごしうぎを上あるよ、向むかふの客きやくだつて御苦勞ごくろうだと  
 か何なんんどか云いつて骨折賃はねをりちんを呉くれるだろ、然そうすりやアお前まへ、  
 兩方りょうほうから取とれるじやないか



喜旨きしめい〜、流石さすが花魁おいらんそんなら甘く誤魔化ごまかして参まゐりやす  
花はなおぬかりでないよ、しつかりおやりよ、

喜き宜よしうがす……

と又田五左衛門またたごいざゑもんの處ところへやつて参まゐり

喜きへ、唯今主人ただいましゆじんに申聞まをさしきけましたら、それは何なにうも御信切ごしんせきの事こと

で、花魁おいらんもさぞ草葉くさばの蔭かげで、た悦よろこびなさるだらうし、お前まへもた

伴ともをして行ゆけば、それ御祝儀ごしらぎにありつく……へ、又向またむかふの

お客きやくから……へ、夫それでは是これかられ伴致ともいたしやセウ

客きやくハ、直すぐに参まゐりやせう、そんなに催促さつそくがましいことを云いは

なくつても、上あるものは上あげます、直すに参まゐりやせう

と是これから二人連ふたりづれで出掛でかけて参まゐりましたが、喜助きすけは何處どこの寺てらに新あた

らしい墓はかがあるかと、彼方あちこち此方こちキヨロ〜して歩あきまして、や

て或寺あるてらの前まへにと参まゐつて、

喜き且那たんな〜、こゝ此處こゝです〜

客きやく誠まことにハア飛とんだことになりやして、人間にんげんの命いのちチユウものは、

分わからんもんでガアす、『明日あすありて思おもふ心の仇櫻あせくらよは夜半あちしに嵐あらしの吹ふ

かぬものかは』と云いふ通り、ハア誠まことにつまんねエこつてがす、

是これ喜き助すけどん、何宗なにしゆでがす（喜助元きすけもとより知しりませんから）



喜「ウ、エ、れ、れんげ

客「何にれんげそんな宗旨イあるもんかア『軍酒禁入山門』とな  
ア程これア禪宗だアね、禪家チエウんだ

喜「エ、

客「これ這入つて何方へ行んだア」

喜「マ、待て何處に新しい墓がねエか

客「何イしてエるんだ、此處らで花アかうべいか」

と喜助に銀貨を渡しますと、喜助は門前で花と線香を買取りま  
して

喜「オイお婆さん、此線香へ火をつけてくんせエ」

と、御花と線香を持って、寺へ這入りましたが新らしい墓が容易に  
見當りません

喜「旦那此處、此處でげす」

田五左衛門は花魁の墓と思ふもんですから、一心に跪いて、合掌  
いたしまして、泣きながら

客「これエあまツ子巴エ様子がいゝツて戀煩いして死んだアツて  
、巴エ浮氣イして來ねエチエじやねエし……死ぬツ時に巴ア  
ニ一言いゝたいなんて……これあまツ子馬鹿げたアこたア



云ふもんじやねエ、魂魄此土に止つてなんて馬鹿げた事ウや、  
 るもんではねエ、郵便の届かねエ處てエあんめエし葛西新田の  
 田五左衛門様こう書いてよこせば、直ぐに届いて、己アオツ走  
 つてくべいものウ、馬鹿げた事ウやれるもんでねエ、己アもつ浮  
 氣は屹度しねエ女の膚にはもう決して觸んねエからよ、己がの  
 いふたアことを、此世の土産とウしてエ………浮んでエ呉れエ、  
 どうれ戒名でも書いてエいつて、何んチユウんだウ、明治元年二  
 月二十六日、精靈妙空信士（と繰返して讀んで不思議さうに）  
 コレ喜助、もまつ子は何時死んだア

喜エ、此間………

客「此間では分らねエ、此處に明治元年と書いてあるがなア  
 （喜助は大聲で）」

喜「アツ間違た〜」

客「アツ驚いた馬鹿氣げた聲出すもんでねエ、只でせエ魂魄此土  
 に止まつてなんて、己ア魂魄が咽笛へ喰い付たと思つたア、是  
 れ喜助、コレ何んチユウこつたア、人のウ墓でエ泣かせるなん  
 てエ馬鹿〜しい、己アのおまつ子墓は何處だア

喜「此處〜」



客「何をウロくして居るんだア、た前まあツ子の墓場忘れたア

とは何の事だア

喜「エ、何處に新らしい墓が……旦那此處く……

容易に見當りませんから、方々グルく廻つて居ります

客「何だハア此らアもう三度廻りますぞ、あまツ子の墓ア、

忘れるチユウ事があるもんか

喜「有りましたく此處だく

客「ありましたかア、何處にイ、成程ウ新らしい立派の墓で……

喜「へ、花魁がた死なされた時にイ朋輩の女郎衆かよつて、石

碑を立てましたからへ、仲々立派でへ、私も花魁とは兄弟全様にしたんだから旦那のね供をすりやア屹度骨折賃はわくんなさるといまして……へ、

客「私イいくら田舎もんでも、氣のツかん事アねニ、そんな催促

がましい事ウいふもんでねエ夫れじやいよく此墓が、あまツ

子のに違はねエか

喜「へい」

客「何にく信士彰義隊の墓……コレくこりやア彰義隊の墓

だア喜「アツ又間違つた……此處く



客「なんだア先刻の墓ア馬鹿げてでかゝつたが、今度は大變ちッ  
 ばけたなア……………なんだ喜助……………文久三年信妙童子信妙童子  
 コレ此墓ア子供の墓だアぞ  
 喜「ア、ツ又間違つた……………」  
 客「コレ／＼喜助エ馬鹿野郎ウ、人ウ馬鹿にしやアがつて……………」  
 己「アのあまつ子の墓ア何處だアイ  
 喜「エ、旦那、これだけ墓が並んで居りますから何うぞ此うちか  
 ら宜いのをた見立願ひます。(完)

飲取槍

神田伯山口演

小野田翠雨速記

黒田の御家に、八家の勇士と云ふがあり、加藤の御家には、十箇  
 の勇士と云ふがあります、其黒田家八家の一人で、母里太平と  
 云ふ御方の御家に、日本號槍一名飲取槍と云つて、未だに遺つて  
 居るさうでござりますが、此槍は日本三槍と稱はまして、總て三  
 筋あります、其一筋は、秀吉公九州陣の時、上方の同勢薩摩の  
 仙代川を泳ひで……………赤裸裸一本で泳ひで居るところへ、轡の紋



の附いた旗押立て、薩摩の同勢ドツとばかりに押して来たから、皆くツラ敵が来たど、此方の岸へ泳いで逃げ上る仲に、立花左近將監の家来、十時傳右衛門、赤裸の儘對岸へ泳ぎつき、拵寄せ来る敵の槍を取って、一番槍を入れた、これを十時の赤裸の槍と稱えます、今一筋は、文祿元年秀吉公朝鮮征伐、尤も現今は人も利口になり器械も整って居るから、日外の日清戦争も僅かに一年で済みましたけれども、此時の朝鮮征伐は仲和談はあつたけれどもも七年掛つた、其内で手柄を顯はしたのは、加藤主計頭清正公であつて、朝鮮の二王子を生捕にしたのみならず其頃朝鮮隨一

の美女にて孟浪妃をも合せ捕りまして暫らくは安平の城に居られた時に、朝鮮より明國へ加勢を頼み、明の使者安平城に来て、清正に面會を致されて云ひますには既に小西攝津守行長も承知あつたに依つて、清正公に於かれても、早速和睦の支度あつて、其の孟浪妃を戻し、早くに日本へ立還ぬられるやうに……若し承諾致さんに於いては、明の四十萬の大軍を以て、日本の同勢を塵殺に致すから左様心得るやうにと、斯う云ふ嚴談であります、時に清正公は家来に吩咐、此美女を庭で磔刑にあげた、斯く申すと大層清正が無慈悲の事をするやうでありますけれども、若し斯る美女



を日本に引歸れば、好色の秀吉故、キツと閨の枷を申付けるに極  
ツて居る、左様云ふ不規律の事があつては、甚だ君の爲に宜しく  
ない、さうかど云ツて此使者の威喝に驚いて、其儘生還したとあ  
ツて日本の恥辱になる、還す譯にも行かず連れて往く譯にも往か  
んから、ソコデ磔刑に上げ使者に向ツて大音に、

加「コレ能く承れ、假令小西行長和睦の事を承知致したからと  
て、此清正にも遠れとは何事だ、吾は我が主君秀吉公の命を受  
けて此朝鮮に参り居るのだ、決して小西などの指揮は受けぬ、  
小西などは吾眼から見れば黄口の小兒だ、四十萬の兵を以て攻

めて参るなら攻めて参れ、一日壹萬づゝ殺し四十日で四十萬盡  
く塵にして見せるから、立歸ツて其趣を明王へ申せ

と、威丈高になツて申付けたから、明使は驚いて立歸ツて其趣を  
復命たが、明國では既に四十萬の同勢を徵發して、朝鮮へ援兵と  
して差向けた、小西行長が平壤を棄てて退いたのは此時でありま  
す、之れを聽いて京城にある浮田秀家は諸將と謀議を凝し斯く明  
の大軍と戦ふには、朝鮮各所に散在せる諸將を京城へ呼び集め、  
兵を一野に纏めんに如かじと、評議一決しましたから、檄を諸方  
へ飛して、諸將の退陣を促します、然るに小早川左衛門尉隆景



黒田甲斐守長政、立花左近將監宗茂は殊に之れを遺憾とし、大に不服であります、其理由は我兵既に平壤まで攻入り、今や將に破竹の勢を以て鴨録江を渡らんとするに臨み、敵の大軍押寄せ來れるが爲めに、一足りたとも後へ退いたりとあつては、末世までの恥辱なり、暴虎憑河の譏を受けやうとも、我等は一步も退かじと、決心せられたものゝ、何分にも京城より退却せよと、使者櫛の齒をひく如くでありますゆゑ、此命令に背く譯には成り難く、ソコデ一日幾里と云ふ道程、僅かづ、退却を致されます、又後へは物見細作を遣はし敵が何の邊まで押寄せ來れるやと、偵察し

て一々注進致させます、丁度碧蹄館と云ふ所まで參られました時一人の細作馳歸つて最早敵の大軍は、間近かまで押寄せ來ましたとの注進を聽いて、小早川立花黒田は然らば此處にて逆撃すべしと決心せられましたのは、誠に勇々し次第であつて、大和男子の魂は斯くありたきものであります、其時に立花の家來に、野村主膳と云ふ者が、握飯を持つて來て、隆景の前へ差出しますと、隆景は戦陣に臨むにも腹を拵らへなければならんと、握飯を三箇食べた、黒田長政も食べて、唯今の貴族院の副議長黒田長成侯の御先祖で、七人の荒武者の一人、野村主膳も一箇食へ、後に七箇殘



ツて居た、それを家來に食べると差出したが、家來誰あツて一人も食べるものがない、皆ガタ／＼して居ると云ふものは、朝鮮人の手並は皆知ツては居るが、明の四十萬の大兵と明日は戦ふと云ふのだから、有弊にガタ／＼して食ふことが出来なかつた、其時野村主膳が隆景に向ツて、其握飯を食ふことこの出来ぬやうでは、明日は互角の戦が出来ないから御覺悟なさいと、耳打ちした、隆景は承知したと、其時始めて背向の備を立て、四十萬の敵を見せないやうにした、明の大軍は既に碧蹄館南大門へと攻來つたが此の大將は李如松と云ひ、野も山も皆一面の軍人ト／＼／＼バア

／＼と押し來た、此時小早川は采配押取り、宜し打てツと號令を掛けたそれで、後をグルリと振向き、一度にドツと鉄砲打出すタシログとところを、槍組が槍を揃けて突出す、明軍何條堪るべき右往左往へ散亂する、此時立花の陣中より一人槍を提げて敵陣へと跳入り、敵も味方も確かに承れ、斯く云ふ我は大日本筑後國山邊郡梁川の領主、立花左近將監宗茂の家臣、十時傳衛門朝鮮碧蹄館南大門一番槍と名乗ツたり、爰に安田作兵衛と云ふ豪傑がある、天正の十年六月二日、本能寺に於て信長を打取ツたのは此人、箕浦新左衛門、古河九兵衛と共に、明智の三羽鳥、稱せられ



た、程の勇士であるが、信長を打取つたる一件より、秀吉公の御悪を受け、諸方を浪人して歩いたが、其後立花の家臣と相成る時壹萬石と云ふ知行、スワ戦場と云ふ時には、一番槍一番乗一番首は他人に譲りません、これが拙者の一萬石の價値だと云つて奉公致した、れを常々十時傳右衛門悪くしと思ふから、安田のはなをわかつて一番槍を入れた、安田は十時に一番槍を入れられては、平常の言葉に對しても恥るから、續いて馳け出し、馬上に立上り大音上げて、

安「大日本筑後國梁川の領主、立花左近將監の家來、安田作兵衛

車當時天野源右衛門邦次、碧蹄南大門投突きの一番槍と、四十萬の大軍中へ馬に乗つて馳せ込んだが、其安田の投込んだ一本の槍で、三人を突殺した之を投突一番槍と稱へる、今一槍と云ふのが、前辨じたる母里太平の飲取槍、一名日本號の槍であります。

此槍は天正より十三年秀吉公關白になられた時、天皇陛下より一箇の劍を賜はつた、中身の長二尺五寸、無銘だけれども、仲々の名劍 陛下より賜つたるものであるから、腰に帶するは勿體ない、槍にしやうと、柄の長さは五尺、現今の竹刀のやうに、合せた



竹で柄が出来た、千段巻が毛で巻いてある、何の毛だか未だに分りませんが秀吉公も大切に爲すつて、錦の袋に入れて、御居室の御頭の上に掛けて置かれる、然るに天正十八年小田原征伐の時、秀吉公御馬に召され、勿論御槍は近臣に持たして御出陣、山中合戦の時、福嶋左衛門尉正則が、敵陣で槍を突折つたのを秀吉公遙かに御覽せられ、手緩しと召されけん、近臣を顧み

秀「其槍を福嶋に取せる

と、福嶋へ其槍を下すつた、福嶋は其様な尊い槍とは知らんが、秀吉公より賜はつたのだから、難有く頂戴して、思ふ存分に働

大功を立てたが、それで小田原合戦は終り、奥洲仙台の伊達政宗も來つて降参したから、大坂へ御歸りになつたが、或る一日御近臣に向つて

秀「コレくアノ槍が見えんが如何致した

近「顛沛際ゆる御失念であらせられますか、日外山中攻の節、福

嶋左衛門尉へ御遣はしに相成りました

秀「左様であつたか、然らば早々左衛門尉をこれへ呼べ

幸ひ左衛門尉も、大坂に居つたにより、其趣を申傳へる、早速に

左衛門尉罷出る、



秀「時に左衛門尉、日外其方に槍を取らせたが、其方所持致して居るか、」

福「難有く所持仕ります」

秀「持つて居るなら、宜しいが、彼槍は余が天正十三年、關白に叙せられる時、天皇陛下より恩賜の劔を槍に爲たのであるから、大切にするやうに……尤も此方に於て入用の節は取上るから左様相心得る様に、又彼の槍を持つた時は、日本を掌握したと心得るが宜し、依つて以後彼槍を日本と名付くるから……」

左衛門尉始めて聞いたから、飛立つ程に喜び

福「誠に有難いこと、然う云ふ結構の御槍と存せず今まで所持致して居りましたが、此後は尤も大切に謹んで所持致します」

と、夫から福嶋は寝ても寝ても其槍を大切に、何うか斯う云ふ槍を使つて充分に働いて見たいが、綾悪今戦争がないから、まことに腕が鳴てならん、或日家來を呼んで、

福「コレ、何處に戦争はないか、泰平で結構だなど云ふが、軍人は戦がなければ面白くない、何處へ往つて探して來い、家「深したつてありあ致しません」

福「然からば眞刀を以て余に切つて掛れ、此槍で槍玉に上げてく」



れるから……

なごし何時も何時もソナ事を云ッては悦んで居る、尤も何時戦に出ても負けたことがない、戦に出て負たことのない程面白いものはない、人間を殺して、譽められて出世もするのだから、是程面白いことはありません、左衛門尉は頻りに椽側へ出て、打返し椽を眺めて居られるところへ、黒田甲斐守長政の家來、母里太平か、何か用があつて御使に参り、還へらうとする時に、左衛門尉はコレ〜と呼び止められた、此時福島の際には、吉村又右衛門、大橋長右衛門其他福島家勇士の面々、綺羅星の如くに居並

んだが、中央に母里太平両手を突きますれば、

福「ヤ毎度戦場では英名を承知致し居るが、座敷で斯く對面致すは今日が始めである、今日は使者大儀に存する、ドウモ武士は戦争がなければ面白くない

母「左様でございます、何うも戦争がなければ、腕が鳴ッて可かんと存じます

福「左様ぢや、サア早く酒を注げ

ど、持ッて居ッた大盃へナミ〜と酒を注がして、グイと呑はしサアこれを取らすと、母里が辭義をするところへ、大盃を放ッ



て、一體此の母里と云ふ人は至ッて酒が好きだけれども、此人は酒の上が悪ひ、酒を飲むと人と争をするのが癖だ、夫故に黒田甲斐守は、其方は酒の上が悪ひが、當家中はみんな其方の氣象を知ッて居るから宜いが若し他家へ參ッて無調法があッてはならん故、決して他出致した時は酒を飲むなど、吩咐られてあります、酒を飲んで酔ふと、種々癖があると云ふが、一眞面目、二機嫌、三酩酊、四笑ひ、五泣き、六くだまき、七無心、八放屁、九盗み、十喧嘩と云ッて、太平は此喧嘩なんであるから、太平自身も何か無調法があッてはならんと思ふゆゑ。

母「誠に思召は有難い仕合せでありまするが、手前は下戸でございます、いませ何うか御免遊ばしますやうに……」

福島は苦笑ひして

福「コソ〜勇士豪傑が酒を飲まなければ、勇氣の出ぬものぢや酒は天の美祿と云ひ、又百薬の長と云ッて、米の膏で製したものだ、其酒を飲まんと云ふがあるものか、飲め〜」

母「何分にも性來の下戸でござりまするから、御免を蒙ります」

福「左様か、飲むと如何云ふ心持になる」

母「第一胸が悪しくなり、頭痛が致し、斯く着座致し居ることさ



へかなはなく相成ります

福「それは至極面白い此方の傍に居るものは、皆んな豪傑だによ  
ツて、一人も酒を飲まんものはない、苦しうない飲めく、酒  
を飲んで苦しむところを見たことはないによツて、飲んで苦し  
で見ろ

傍に居る面々は亦しても益なきことを御意遊ばすと、苦々しく思  
ツて居る、

福「サア早く飲めく」

母「何うぞ御容赦を……」

福「愈々飲めぬか

母「飲めませぬ

福「仲々剛情の奴ぢや、飲めなければ降参と云へ、久しく戦場で  
敵の降参と云ふことを聴かぬから、其方が降参致したと云ふ言  
葉を、酒の肴にするから、飲めませんと云ふ口で、降参致した  
と云へ、

母里太平は黒田八家の一人、何れの戦場でも降参など云ふこと

は夢にも知らない、降参などは大嫌ひ

母「飲めませぬ故飲めませんと申たに、されば、又御無禮、拙者



も黒田甲斐守の家來、戰場で萬一の事があらば、鎧脱ぎ棄て潔よく割腹して御覽に入れる、降参なんぞ大嫌ひ、決して降参致しません

福「ウム面白い、降参せんければ飲め、其盃は其方に遣したのだ、戰場ならば見参致したので、其見参致した盃を其方が受けんと云ふならば、降参したと申せ、余も黒田の勇士母里太平に降参したと云はせれば名譽ぢや、サア飲むか降参するか  
母「降参は決して致しません

福「然らば何うぢや、其方が此大盃でナミ〜と注がして飲めば

其方の好きなものを遣はすが、何うぢや、

母里は元々好きな酒故、一升や二升飲んでも何んでもないから、こりやア飲んで、何か貰ッて行ッた方が宜いと思ッたにより  
母「然らば御意に従ッて飲みますれば、何んなりと頂戴致します  
が宜しうござりますか

福島はニコ〜して

福「ア〜やることも〜、やるから飲め

母「有難い仕合せ、エー誰方が證人を御立て下さい

福「此處に居るものは盡く證人だ、サア注いでやれ〜



と云ふから、長柄の御銚子で、大盃へ満々と注ぎます。母里  
太平兩手に受て、ツークと飲む工合は、土鼠の穴に水を注込む  
如くであるから、福島は之れを見て、イヤ何うも美事く、仲々  
下戸のやうな飲み振りでない、惠來いもんだと感心して居る、や  
がて飲終ると

福「サアモウ一献遣すが何うぢや

母「斯くなりますれば、一献も二献も同じ事、頂戴仕ります

福「サア〜飲め〜

又太平飲んだ

福「これは美事だ、今一献如何だ

母「頂戴仕ります

と遂々三杯飲んだ、道がの福島も驚いて

福「これは惠來、サア返盃致せ、放れ〜と

放らしてナミ〜と注がせ、グツと飲んで

福「サア太平、能く飲んでくれた、兼ての約束だから何んなりだ

遣はす

母「難有さ仕合……

福「此方の右手を遣はす



母「御手などは入りませぬ」

福「首を遣す」

母「首も入りませぬ」

福「それでは婦人を一人遣はさう、勇士豪傑は婦人を好むものぢから、婦人を一人遣はさう、源三位頼政は鶴と云ふ化鳥と退治して、菅蒲前と云ふ美女を貰ふたこともあるから、女子を遣はさうに」

母「拙者には妻が一人ございます、これが修羅をもやして家内に風波が起りましたしても困ります、亦妻を置く程の力もありません」

と断はる

福「それも左様だ、然らば鎧甲馬馬具の類を遣はさう」

母「それも入りませぬ、其御頭の上にありまする長ものは何ん

でござります

福「これは槍だ」

母「それを頂戴致したうござります」

福「これはやられぬ、我君秀吉公が一天萬乗十善の陛下より恩賜のものぞ、某が小田原征伐の時、拜領致したものだから、此槍はやられん」



母「左様承りますれば、猶以て其槍を頂戴致したう存じます武士の表道具のことゆゑ、猶更頂戴致したうございます

福「剛情な奴ぢや、これはやれんと云ふに……………」

母「然らば何故槍はならん、槍を除くの外と仰有らん、何んでも望みのものを取らすると御意あつたからは、槍も其何でもの内に含蓄して居りませう

福「何んと云つても此槍は取らせることはならん

母「それならば降参したと仰有い、某が其槍を頂戴致したいと、申したのは、戦場で見参致したと同様、見参致したのに遣れぬ

と仰有るならば、降参致したと仰有い、倍臣母里太平が、尾州

清洲の城主八萬石、福島左衛門尉正則公を降参したと云へば、

拙者の名譽……………」

福「無禮を云ふな、素倍臣の分際として、福島に降参とは何事で

ある

母「夫れならば槍を下さるか

福「槍はならん

母「然らば降参……………」

福「無禮者め……………」



傍に居ッた一人

近臣「畏れながら領主には降参と仰有いまし、戰場と云ふではなし、ホンの酒宴の席上、別段御恥辱と相成ることもござりますまい

福「イヤ例合座興でも、降参致したなどは申されん、剛情の奴

と云ふから、母里は其儘立ッて歸らうと致しした、道がに福島も其儘では氣に掛ると見え

福「コン〜、母里何故立歸るのぢや

母「一寸の虫にも五分の魂とやら申しますから、必ず後悔遊ばしませんやうに……

福「待て〜、舊の座につけ、何んだと一寸の虫にも五分の魂、了簡がわッて歸ると申したな了簡とは何んなことだ、此福島に決闘状でもつけるぞ云ふのか、面白い相手を致さう、其節螳螂の

斧笑を受けるな

母「決して決闘状などはつけ申しません

福「然らば何の様なことを致す

母「到底理屈では身分が違いますから協いません、夫故拙者は立



歸ッて日本六十余州津々浦々、至る所に張札を致します

福「何んと云ふ張札を致す

母「加藤福島と云ッて、秀吉公の股肱の臣とも云はれる、其福島左衛門尉殿が倍臣たる母里太平に向ッて、二枚の舌を遣はれ、下卑下郎にも劣ッたる……………」

と云はんとすると

福「無禮なことを申すな

母「然らば降参したと仰有い

福「降参はならん

母「夫れならば御槍を……………」  
致方がないと思ッたか

福「エ、持ッてけ、槍を遣はす

と、福島は口惜涙を流して、槍を避塵から下し、これが今生の見納めと思ふから、打返し〜見て居る

福「サア母里持ッて行け、箇様な結構な槍を持ッて罰が當るな

母「これは難有い仕合せ、これでこそ福島様でございます、御箱を頂戴……………」

福「サア持ッて行け



母「御袋を頂戴……………」

福「持ッてけ……………」

母里太平は大悦で、其槍をかついで、ドシ／＼と歸ッて来る

福「コレ／＼太平が途中で酔拂ッて倒れるだらうから、ソウと往ッて槍丈け拾ッて来れ

近臣は仕方がないから後をついて見に往くと、仲々倒れるところぢやない、ズン／＼擔いて歸ッて仕舞ッたから、其事を申上げると、困ッた奴だと、正可に棄て、置く譯にも往かぬによッて、其事を秀吉公に申上げると、秀吉公黒田斐守を御呼出しになり、其

方の家臣母里太平、福島家より槍を持ッて来ッたさうぢやが、アレは陛下より賜はッたる大切の槍故、大切に致すやうに……………此方に入用があれば取上るからと、申渡されたゆゑ、甲斐守は急に其槍が欲しくなり、何とかして取上げやうと思けれども、何と云ッても仲々よこさない、又同役からもヤレ何と取換わてくれ、之と取換てくれと、種々と云ッても決して應じない、然るに文祿元年朝鮮征代となりました、或時大勢打寄ッて竹陵軒の虎狩、誰れは何匹生捕ッた、誰れは幾匹取ッたと、仲々の大騒ぎ、時に黒田の家來管六之助と云ふ人が、牡虎を獲る時に、左の頬を裂かれた



が、トウ／＼取ッて押え、夫から虎の穴に這入ッて、子虎をも獲えたが、日本で虎穴を見極めたのは、此管六之助と曾我十郎丈であります、大勢打寄ッて虎狩りの話をして居ると、後藤又兵衛が大勢に向ひまして

後「借て各々方、母里太平が未だ虎を取ッたと云ふことを聞かぬが例の日本號の槍を得意氣に持ッて廻る丈で、未だに一匹も獲ッたと云ふことを聽かんが、如何であらう一つ母里が來たら、何んとか、からかつてやるうではござらぬかと、話をして居る處へ太平が來た

後「オイ母里、皆々虎をとッた自慢をして居る處だが、何匹獲ッたかそれを承はりたい

太平は未だ一匹も獲らないのを知ッて居ながら、態々其様な事を云ふと思ッたから、忌々しい事に思ッて

母「イヤ拙者が此の竹陵軒に參ッたら、虎がみんな拙者の威に畏れて、一匹も残らず逃げて仕舞ひ、未だ一匹も出會ない、夫故未だ一匹も獲らない

後「イヤ／＼黒田八家の一人とも云はれる、貴所が未だ一匹も獲らんと云ふのは、如何にも臆病未練に當る、大きいのを一匹で



もい、拜見致したいものだ

母「イヤ拙者が昨日大な虎一匹を履殺したが、朝鮮の虎は日本の狼のやうなもので、此様なものを獲ったとて、格別功名にもならんと思つたから、谷底へ蹴落して仕舞つた

後「イヤ何は兎もあれ一匹拜見致したい、貴所の憶病は黒田公の御恥辱、黒田公の御恥辱は大閣殿下の御恥辱だ、夫から日本國の恥辱にもなる、明日は是非御手元拜見致したい、貴所は日本號槍を所持なされるよしにて、常々御自慢あるが、斯う云ふ時に其槍で、大きい虎を獲らつしやい

ど、冷評されたものですから、母里はブン／＼怒つて

母「ウム然らば明日は是非大きい虎を取つて御目に掛けるから、待つしやい、拙者若し一匹にても獲らなかつたらば、決して生きては日本へ歸へらんから……………」

ど、ブン／＼怒つて出て往つて了つた、母里太平何うしても、獲らない譯に往かないから、所々を探し歩るさますと、向ふの方に一匹小犢のやうな虎が居つたから、占めたと突き出す槍先に、虎はムツクと起上り、咆哮する其有様、土石を飛し、烈風起り、實に凄じきこと云はん方なけれども、太平今更突かぬ譯にも往き兼



ねて、リッ／＼としないで突出す槍先を、虎の口の中へと打こ  
だから、虎は奥歯でがり／＼と鎌先を咬へた、南無三と槍を引  
かうと思ツたが、引くことも出来ない、突かうとしても突くこと  
が出来なり、太平は當惑したが、其儘にして置く譯にもならんか  
ら、大聲上げて、

母「誰か来てくれ〜」

と、呼ばれば、其聲をき、付けて後藤又兵衛がやツて来たのを見  
て

母「ヤア又兵衛宜い、所へやツて参ツた

後「母里太分大きいな、これは大層な虎だ、我々の取ツたのより

三層倍も大きい、一匹が五匹にむきいさうだ、御手柄〜

母「後藤〜其様なことを云ツて居なへで、

一本突いてくれ〜

後「虎が槍を咬いたな

母「咬いた……………」

後「それは可かんな、併し拙者が今突いては尊公の功名を横取す  
るやうに當るから、突く譯には可かんな、尊公が頼むと云ふらば  
突いてもやらう



母「イヤ武士が頼むと云ふことは決していはん、唯突いてくれれば夫れて宜しい

後「馬鹿をいはッしやい、夫れでは尊公の持つて居る日本號の槍と、拙者の槍と換えて貰はう、槍を換えてくれるならば、突いてやッても宜い

母「夫れも出来ない、此槍は貴所も知ッての通り、大功の槍故換へることは出来ない、能く人が足元を見るといふが、尊公の手元を見るといふものだ、此槍は如何しても取換えることは出来ない

後「宜しい尊公が取換えることが出来ないなら、尊公が虎に喰はれるとも如何とも勝手になるが、

母「夫れは又た情ないことをいはッしやる

後「然らば拙者の弟分になるか、黒田八家の一人、母里太平ともいはれる人を、拙者の弟にしたとあらば、拙者の名譽だ、如何だ弟分にならッしやるか

母「弟分とならう、私も又た後藤又兵衛の兄弟分となれば名譽だ兄弟分にならう

後「イヤ弟分になるならば突いてやらう



と突如持ッて居た槍をリウ〜としごいて、虎の耳の下を覗ッて、ヤツと一本突いた、其時虎は後藤又兵衛を、恨めしうに見て、

虎「トラさこえませぬ又兵衛さん……………」

と云ツたさうだが、正可に其様なこともありません、トウ〜後藤又兵衛其虎を突殺して仕舞ツたが、夫から母里は又兵衛の弟分になツたといふことであります、又此母里家は代々母里太平と名稱り、黒田家に仕え居りましたが、今日でも其槍が遺ッて居ることのでございます、これにて御免を蒙ります

### 貸本屋の夢

橘 家 圓 喬 口 演  
小野田 翠 雨 速 記

論語といふ經書を見ますと、孔子様は常に周公の夢をのみ御覽になツたとありまして、周公といふお方は、周の成王といふ王様の叔父君に當たらるゝ間柄で、仲々の大聖人で成王の幼少の時より之れを補佐して、能く周の天下を治められた方でありまして、孔子様は、常に此周公を慕はれて、我も亦周公の如き徳行をいたしたいと、周公の事のみ思はれて居るから、始終周公の夢をのみ御覽



になる、老年にならぬうちは常に周公の事のみ忘れずにお出でになつた、シテ見ると何うも人間と云ふものは好きなるものは忘れられませんが、或は然うかも知れませんが、相撲好きの方は相撲の夢を見る、尤も好きとなると夢中になるものでげすから……釣好リ方が表を歩くと、大地が一面の水に見える、歩く方が魚に見ゆる、奇麗な御婦人がお出でになると鯛か比良魚に見えます、私共が往けばおこせかダボ鯨に見られる、古い川柳に

「下馬札を柱馬と讀む將棋好」

又之れを最う一倍悪く云へば

「下馬札を下馬と讀む博奕打」

種々此の好きな事は妙なものでげす、テ當今ではコノ往來を歩くんでも、お上の御注意が好く行届きますから、誠に往來が清潔でげす、それに小僧さんのお役が夕方一役減じましたな、私共小供の時分は能く夕方になると、大きな用水桶から汲んで、水を往來に撒きます、今日では岩谷商會大きな車でガラ／＼曳いて歩きますから、小僧さんが彼丈役が助かりました、元は然うでない、小僧さん同士にふ側の小僧と此方側の小僧と、大きな杓子を振廻しや何かして、遊び半分水を撒いて居ます、所へ千鳥足一坏機嫌で、



向ふへ寄ツたり、此方へ寄つたり、是が八ツたり歩き、ヨロ／＼  
歩ツて来る生酔へ、ザブンと水を一杯打掛けました

酔「オイ／＼、小供に水撒きさして置いたツて、大供は矢張眼を  
放れねえよ、氣を注げなくツちやア可かねえよ

小「横町の肴屋の八さんに水を打かけました、……ツイ疎勿で…  
御免なさいまし

此家の女房「アノ魚金さんは、平常は好人物だが酔と全で人物が  
變て了ふんで困る、金さん誠に相濟みません、何卒御勘辨なす  
ツて下さい

金「エ、何んだと、小供に吩咐やがツて、態々水をかけさせやが  
ツたんだらう

女「誠に濟ません、ツイ小僧が悪戯をしたもんですからかけたん  
ですが、何かまア勘忍しておくんない……早くお前奥へ逃  
げな……金さん誠に相濟ませんが御免なすツて下さい……

金「御免なすツて下さい……

女「まア宜いぢやないか、勘忍しておくれ

金「まア宜かねえ……今の小僧はお前んとこの小僧かい

女「誠に相濟まないことをしましたね



男「誠に相濟まんぢやアない……さアアノ小僧を茲へ出ておく  
んなよ」

女「ダカラ詫て居るぢやアないか

金「ダカラ詫びるぢやア分らねえ、何う云ふ宿意があつて私に水  
を掛たんだか……」

女「宿意も何もあつたんぢやアない、今云ふ通り小供が悪巫遊戯  
をしたんだから誠に濟まないと謝罪して居るんだから勘辨をし……」

金「謝罪たつて私や不可だ……因縁を聴かして貰はふ

女「因縁も何もありやしないやね

金「不可だ、何しても因縁を聴かして貰はなけりやア此所動か  
ねわから左様思へ……エ、オイ、積つて見ても分りさうなもんぢ  
やないか、エ、オイ私やアお前さんそこへ腐つた肴ア賣つた覺え  
はねわが、言てえ事があるなら口で云つてくん何も小僧に吩  
附て斯んなに水をブツ掛けなくつても宜いぢやアねわが、意趣  
意恨があるなら、何故口で言つてくんねえんだ  
女「ダツテ小供の事だから……」

金「小供くつて其様に云つてくれるな不可でね、小供だつて半  
分や四半分の人間ぢやアねわ、矢張人間一人前だ、大敵を見



て畏るべからず、小敵を見て侮るべからずッてことがあるから、仲々油断はならねぬ、敵の間者が計りがたい、

女「其様な馬鹿なことがあるもんかね

金「イヤある、小敵を見て侮ることは出来ない、さあ早く小僧を出せ、小敵を出せ、

女「馬鹿なことを言ひでないよ金さん、人が立つぢやアないか最う可から勘辨して歸ッておくれ

金「イヤ歸らねぬ、小僧を出さねぬうちは何うしても動かねぬ、誰が何てツタッてかんでツタッて……グ……グウ……グ……

女「オイ〜寝ちまッちやッ可かないよ、厭しかいてさ、見世先へヒツクリ返してッッて……因るぢやアないか……オイ〜……

金「グ……グウ……誰が何てツタッてかんでッッて……

女「オイ〜……

金「大敵と見て畏るべからず、小敵と見て侮るべからず、敵の間者が計りがたい……

女「諸らんことをお云でないよ金さん……其處へ此家の主人が歸て来て

主「ナニ金さんに水をかけて、恐らしたから、金さんが店先きて



寢込で了ツた、仕様がねね奴だ、打棄ツて置け、其内に眼  
 が覺るだらう、其内に間もなく金さん眼をあさますと  
 金「オヤ、ハテナ、此處は何處だらう、今日は商賣が不漁で休  
 みで何時の好きな講釋場へ往ツて、歸りに飲んで……ハア分らね  
 が、何して斯様所へ來たんだらう、此所は何處だらう、何だ  
 なズツと芝生になツて……此様所へ來る譯がねえだが、オヤ、  
 チヨロく流れて居のは水だな、ヤア山清水だ、奇麗だな、何  
 だか、分らねえが一ツ顔を洗ツてやらうかしら……  
 と流れに來て水で顔を洗ふ途端、ヒーン、ト、ト、ト、ト、と馬

蹄の音近く誰か飛んで來る様子  
 金「オヤ誰だらう、誰か來たせ  
 と、小高い所へ上ツて向かふを見ると、砂烟を上げて馳來るは、  
 内藤新左衛門、今袋井駿の偵察、徳川に過たるものニツあり、唐  
 毛頭に本多平八とまで云はれたる程の、其の唐毛頭、被ツてる内  
 藤新左衛門が其日の装束を見てあれば、淺黄には、中一段毛糸を  
 もツて威したる鎧に、縦横頭の小手脛當、紅白鹿白毛と名けたる  
 駿足には、金に梨地の高蒔繪の鞍を置き、梅花七輪散しの立笠、  
 紫五段の尻當に、紅三段の厚房燃立つばかりに相見えたり、馬



は古今の達者ゆゑ、一鞭あて、馳出だす其様子、鬼かどばかり  
 怪しまれ、折しも吹來る向ひ風、唐頭サツと吹き亂し、一言坂の  
 観音堂、御崎の方よりサツとばかりに馬をば小高きところへ乗付  
 けさせ、馬に一息吐かせ、自己も亦ホツと一息吐き、秋の草花を  
 繪いたる軍扇をサツと押開きあをぎつゝ、小手をかざして見てあ  
 れば、一言坂の根方より、袋井巖五十町四面に、碁臺の目を打ッ  
 たる如くドヨメキ渡る大軍の、一陣二陣の間より、一縷の烟濛朧  
 と上ると見る間に此烟一天に廣がり備を包む様子なり、  
 内、ウム甲州に人なしと言はれず、弓矢功者の信玄よな、敵に備

を見透されぬために、冬枯のとなれば、落葉をもツて烟を上げ、  
 備を包むと相見たり、我身不肖とは云へ、偵察役目勤る上は、  
 仕損じあつては申譯なし、遺憾なく見てくれんす  
 と、猶も馬を乗進めました、何がさて如何に内藤新左衛門とは云  
 へ、烟の爲めに思はず馬場と山縣の間へ乗込んだから堪らない、  
 山縣三郎兵衛はサツと吹き來る風と共に、ヒラリ見ゆる唐毛頭は、  
 これこそ確に三河勢、偵察の者と相見えたり、ソレ逃すな取巻け  
 と下知すれば、雲霞の如き雜兵等、前後左右よりヒシ〜とおッ  
 取圍んでひしめくと、素より一人にて内藤も偵察に往かうと云ふ



くらゐの人物ゆへ、少しも恐れはしないが、何しろ向ふは大勢にて、打ッてかゝることなれば、内藤は少しも油断せず、大身の刀を取上ッて、向ふもの嫌ひなく、手練の長刀引抜いて、或は中天に打上げ、或は大地に叩付け、輪切り賽の目細切大根やツこ豆腐や玉あられと……能く斯う法螺が吹けるものです、併し向ふは五六千と云ふ大軍で、此方は單一騎のことなれば、内藤も少しひるんで来る、金さん小高い所で見居たが

金「オヤ〜サア大變だ、俺が何時でも講釋場でいッておす人だ、此奴斯やツちやア居られぬ、早く權現様か誰か助けに寄

越さうなもんだな、俺やア知らしてやらうかしら、困ッたな〜と云ッて居るところへ馬場美濃守信房の後備が、波を打ッて左右へ分かれる

金「ヤア〜來た〜又來た〜……」

と金さん小高い所でまご〜して居ります、さて馬場の後備を破ッて現はれたる人物を如何にと見てあれば、寒江梅黒糸威の大鎧草摺長くザツクリ着なし、同毛糸五枚しころの兜を猪首に着なし、大鹿毛と名づけたる天下の名馬に打乗り、金覆輪の鞍置いて崩立ばかりの染分手網田原彈正正種が三日三夜精進齋して鍊



あげたる蜻蛉切と名づけたる大身の槍を馬の腹首に當がい、徳川家四天王の一人、本多平八郎忠勝が、五百の兵を引連れて内藤が加勢として來たりましたのでございませう、之れに續いて同し徳川四天王の一人、榊原小平太、同じく五百騎の兵を卒ゐて加勢として馳參る、之れを見て内藤は大いに力を得たことゆゑ、ますます獅子奮迅の勢を現はし、當るを幸ひ左右前後へ斬捲くる、武田方は如何にも卑怯のやうなれど不意のことなれば今は詮なし、ソレ飛道具をと下知すれば、心得たりと鉄砲方、五十挺の筒口を向け、一度に火蓋を切ると、其音と云ふものは凄まじく、ドン／＼

ドン／＼とドン／＼と……イヤ金さん驚いたの驚かないので金ア、何うも大變／＼、俺アモウ逃げやう／＼俺ア鉄砲の音は生來嫌ひだ、モウ／＼商賣物のふぐさへ喰はねむやうにして居るんだ、命は惜や、ア可厭だ／＼、ア驚かせやアがツたな、困しい／＼、モウ此所まで來たら大丈夫、先筒の音も聴かず大變靜かになつた、やア又河があるぞ、又河のある所へ出來て仕舞た、今度の河は大變瀬が早ぞ、オヤこりやア驚いた、何處だらうと思たら、信州川中島と榜杭に書てある、こりやア愈々變だぞ、俺に何か憑いたんぢやアないかな、袋井畷から河田







んだらう、俺アモウ鉄砲の音を聴ただけでも厭だ、況して戦な  
んど現在見るのは猶厭だ、ヤ、亦矢來がしてあるぞ、何だか知  
らねえが、厭だなア、エ、ちよいと伺ひどう存じます

番人(奥羽訛にて)「ハイ何んでがんす

金「此處は一体何處です

番「此處は仙臺でがんす

金「へー奥州の仙臺でがんすが

番「ハイ

金「へー一向に見ゆるめれはなんでがねす、アノ矢來が出来て居

ますが、ありやア何んでがねす

番「今日仇討があります

金「へー敵討、そいつは体したもんだ、ちやア何でがねすな、矢張

お武士さんでがねすな

番「婦人でがねす...

金「婦人ア.....

番「ハイ左様で.....

金「左様でがねすかい、そりア見物でがねすな、婦人一人でがねすかい

番「兩人でがねす



金「兩人り……」

番「ハイ左様でげす、姉が宮城野で妹が信夫……」

金「俺やアいよく厭だよ、今日は何したんだらう、俺の身躰へ狐と狸と仙人と天狗が合併して憑依さやアがつたんだせ、姉が宮城野で妹が信夫とは愈々變だ來たもんだから見て往から、少し見せておくんない、少々御免なさい、何も体した人だな、へい少々御免ねえ、モシくアノ向に何でげすよ、床几に腰を掛けて居るのは……」

男「彼人は檢使の御役人でげすよ」

金「アノ正面に座ッて鹿爪らしい顔をして居のは……」

男「彼人は片倉小十郎様だな」

金「へー成程彼人は片倉様でげすかえ……立派な方でげすな、其此方の方に、矢張床几に腰を掛けて、恐ろしい髭ムシヤはありや何んで……」

男「エ、彼人かい、仇敵の志賀團七だな」

金「成程惡体の顔をして居ますね、何んでげすねえ、此方に居る二人の娘は……」

男「向ふに居るのが姉さんの宮城野だね」



金「クツキリと締った好娘でげす、ぢやア此方が妹の信夫でげすな、此方はポツチャリ肥た可愛い娘でげす、何でげすね、ア傍に双髪でもツツサキ羽織を着て居るのは

男「ハアありやア由井正雪でがんす

金「成程由井正雪でげすか、好い男でげすね、此先生が敵の助太刀をするんですね、然してお前さん、此先生が敵を打てやツて

から、姉妹二人の娘はごう云ふことになりませう

男「矢張先生の方へ引取るんでせう

金「ダツテ唯引取るでげすか……」

男「敵を打ツてから、引取つて何れ先生のお弟子中で好人物を見立て亭主にでもするんでせう

金「私ア又亭主は持まいと思ふんだ、先生の家に厄介になツて

居る内には、先生は男は宜し親切だしキツプは宜いし、年を老

ツてたツて先生に惚ます、その惚るにも姉さんが先きへ言出す

か妹が先へ言出すか知らねえが、私ア姉さんの宮城野だらうと

思んだ廓で育ツて、其方には慣れて居るから、先生もまゐるツち

まひます、先生ねえ、ね前さんのね蔭で阿父さん阿母さんの仇敵

を討て貰ツたんだ、シテ見ると私やア望も何にもありやアしな



い、亭主なんぞ持て所帯の苦勞なんぞしたからッて馬鹿くし  
 い、併ね前はんのやうな人なら、何様な苦勞も私するわッてな  
 と言ッて、姉の方から先きへ持掛けて行くと、殊の方でも嗅付  
 て、アラ姉さん申戯言ッちやア不可ません、ね前はんばかりの  
 親ぢやアない、私だッてダダ、ガガの敵討ッて貰たんだから  
 と云つて、姉の方を少し拒む、姉さんの方はナニ生意氣な妹の分  
 際としてと言ふと、妹もイクラ姉さんだと言ッて、此道ばッかり  
 はと互に争ッて、正雪はちよいと困ラア縁付やうと言へば厭だど、  
 言ふし、何様な事言はれちやア先生が困らア、何うするッたッて

斯うするッたッて、二人だから仕様がな、何方にしやうか、姉  
 妹の順にしやうかッて、姉よりは妹の方が年も若し、まだウブの  
 所があッて可愛いから捨てるのも惜いし、誠に何うも困る、困る  
 と言ッて斯う云ふ困るのは宜いね、二人の女に兎や角う言はれて、  
 先生旨くやッて居やがる、ね頼み申しやすせ

自分の大な聲に眼が覺めたら、貸本屋の店先に寝て居りました

(完)





三百餅

柳亭 左樂口演  
小野田翠雨速記

エー相變りませず一席お饒舌を申上げます、お話しといふものはた  
かいもありませんことが却ッてお客様方のお笑ひになるやうに思  
はれますので、毎度申上げまする通り

春浮氣、夏は陽氣で秋ふとぎ

冬は陰氣で歳暮はまごつき

大三十日箱提灯はこわくなし

といふ川柳があります、弓張提灯の方が怖い晩でございます、  
観客方はさういふことはありませぬが、手前共の方は多くさうい  
ふものがあります

女「お前させ何處をのたくッて歩いてたんだい

男「何んだとのたくッて、歩いてるなんて、人を蛇と間違へてや  
がる黙ッてねお胸にあるんだから………

女「吐いてお仕舞いな

男「フム、溜飲と間違へてらア腹にあるんだい

女「もう下ッたのかい



男「能く混せッ返しあがるなア、心にあるから宜ッてことよ

女「困るぢやアないか、世間の様子を御覽な、何處でもお前景氣

好くボン／＼餅を搗いてるぢやアないか、それに家ぢやアお前

おかちんでさへ搗けないぢやアないか

男「搗さねねな

女「搗けッたッてお金錢がなくなッちやア搗けないやアないか

男「宜いッてことよ、仕方がねね、人間といふものは七轉び八起

きといふことがあるぢやアねねか、善いこともあり悪いことも

あらアな、だから搗かうぢやアねねか……なにを……宜いッ

てことよ、世間に手敷を掛けちやア済まねねから、家で以て搗

いて仕舞はうぢやねねか

女「家でどうして搗くんたい

男「水桶に水を一杯酌んで來ね

女「どうするんだ

男「ぐづ／＼言ひなんな、早く酌んで來ねね

女「サア酌んで來たよ

男「裸体になんねね

女「嫌だアねね寒いのに……裸体になッてどうするだい



男「二人で尻餅を搦かう

女「馬鹿なことをお言いでない、馬鹿くしい、本當にどうかしてお呉れな

男「それぢやう是れで餅を搦いて來ねぬな

女「アヲたツた三百かい

男「宜いちやアねぬか、三百餅を搦くんた

女「三百ぢやアお前三切さやアないよ、三ヶ日食へられないぢやアないか

男「三ヶ日食へなけりやア醬油を附はちやアしやぶッて、吐き出

しちやア又た食つてりやア宜いや

女「馬鹿なことをお言いでない

男「何にしろ行ツて來ねぬ三百餅を買ツたと言ちやア世間に外聞が悪いから、表から大きな聲をして吐鳴るんだ……大に御苦勞様でございました、どうもおそろしく出出たぢやねぬか、

どうも……ナニ……二尺のお供餅、それは御苦勞様、熨斗餅が二十六枚、なまこが卅六本かい……フム、おすはりがおそろしく出來て來たなア

女「お前何を言ッてるんだい



男「エ、

女「エ、ぢやアないよ、これを御覽な、買ッて來たが三切ツきキアないよ、なせそんな大きなことを言ッてるだい

男「世間に外聞が悪いからなア

女「馬鹿なことをお言でないよ、そんなことを言ッてないで、これから家主にでも來られると困るぢやアないか

男「家主に借かあツたか

女「あツたか所ぢやアないよ、七月滯ッてるぢやアないか、質なら八月になれば流れて仕舞ふぢやアないか、どうかしなけりや

アいけないよ

男「つごうかしなくツちやアいけないたツて、仕様がねむぢやアね  
ねか

女「仕様がないうツたツて、向ふから來られた日にやア困るぢやアないか、言譯に行ッておいでな

男「馬鹿なことを言ひねえな、そりやア七ッ溜ッてる所にたとひ  
二ツても三ツでも持ッて行きやア言譯になるんだか、どうも葬式の提灯ぢやア行かれねむからな

女「何んだい葬式の提灯といふのは……………」



男「文無しなやア行かれねわッてことよ

女「馬鹿なことをいッちやアいけないよ三十日といふのに……お前も知ッてる通り、彼の人には世間で狂歌家主といふくらゐらゐる、恐ろしい狂歌に癡ッてるんだから、狂歌で以て言譯に行ッていな

男「狂歌てぬのは………

女「分らない人だね、何んだか妾も本當にやア知らないけれど、十七文字が俳偕と川柳で、みそひと文字が本歌と狂歌だよ、生平お前は悪口が功いから、何とか言ッて誤魔化されるぢやア

ないか

男「どうくお前はどうも利功だなア濟まねわく、一ツ家主に逢て誤魔化して来やうよ

女「早く歸ッておいでよ

男「オイよ

表に出ましたね

男「併しどうも乃公の嬢アは利功もんだなア、どうも唯だ家主に行て言譯を言ふのも極りが悪いが、行かなければ嬢に迷惑かされるし、ハア来たくくく、乃公家の障子は張換るとは



出来ねわが、家主の奴め、すツかり張換えて仕舞やがツた、之  
で身錢を切ツて張換たんぢやアねえ、詰り借家子の穢ねえもの  
を賣りやアがツて、その代で障子を張換わがツて……………ハア  
見てやらう〜、ヤ〜どうだい、ハ〜ア禿願を光ラかして坐ツて  
やがる

主「誰れだい、その障子に穴を明けるのは

男「ハ、ア眼と見えますか

主「眼と見えねわ奴があるかい、明けて這入んな

男「ハ、ア明けて這入れツてやがる、明けずに這入るのは煙ぐれ

へなもんだ

主「何にを言ッてるんだ……………八公ぢやねわが

八「ウン八公ですが……………」

主「ズツト這入んな

八「ズツト這入りやア裏口に扱けて仕舞はア

主「そんなに這入らなくツても宜いどうした

八「誠に御無沙汰を

主「御無沙汰ぢやアねえ……………併し感心だなア大三十日に出来  
たといふのは實に感心だ、持ッて來たらうなア



八「イヤごーも濟みません

主「濟みませんぢやアねえ、雨露を凌いで居る家賃を七月も溜て  
困るぢやアないか、質屋だからといッて八月になると流して仕  
舞はア

八「嬢アとも色々相談をしましたが、もう一ヶ月待てれ貰ひ申し  
て、八月になッたらそッくり流さうと思ッて……

主「馬鹿にするなア、家賃を流されて堪るもんぢやアねえ、相變  
ず放蕩をするんだらうな

八「それがね、ツイ貴方の好きなものに凝ッちまいましたんで……

主「それは感心だな、乃公の好きなものに凝ッたといふのは……

八「狂歌に凝ッちまッたんで……

主「狂歌に凝ッた、それは感心だな、この長家は三十六軒あるけ

れども、狂歌に凝うと思ふものは一人もない、貴様が狂歌に凝

たのは頼もしいな、なか／＼隅に置ねね

男「ぢやアもツと中に出ませうか

主「ナニ出なくツても宜いやな、併し狂歌に凝ッたらば上い衆  
方と交際ッたらう



八「エー

主「イヤ方々の先生と交際ッたらう

八「エー、大概交際はッちまつた

主「そりや感心だ、それでは三陀羅法師を御存じかい

八「私の所に三ツ四ツあつたんですが、何處かに抛り込んで形なしになッちまいました

主「それはさんだらぼッたらう、それでは四方赤良先生を御存じかい

八「横丁の内田の班犬の方が強いや

主「犬ぢやアない、それでは餘んまり交際かないんだ

八「交際ねんだ

主「何んだ………併し偶まには吐いたことがあるたらう

八「そりやアまア吐いたことがあるんで

主「何處で吐きなすツた

八「此間他の婚禮に行ッて、御馳走になッて歸りがけにちツと

はかり……

主「汚ない話をするなアさうぢやアない、狂歌をやツたことがあるか



八「そりやアやツたこともありますが、お前さんから一ツやツて御覽なとら」

主「まア貴様やんなよ」

八「まア貴様やんなよ」

主「何んだ貴様なんて……… 女郎衆の心意気で好いのがありま  
した」

八「斯う女郎の心意氣と来ちやア耐まらねらね、四五日前だツた  
が小哥が吉原に行たら、女が初會惚れと来やかツて、小哥の歸  
ろうといふのを歸さなくツて………」

主「馬鹿なことを言ふな、大晦日だにのろけなくツても宜い  
らちやアない狂歌であるんだ」

八「何んていふんでがすな」

主「うそばかり遊女の常に思ひしが」

夜具の無心は眞實なりけり

八「成るほど、功に都々逸だ」

主「都々逸ぢやアない、狂歌なんだ」

八「ア、きやうかぶしか」

主「つさうかぶしとらふのがあるか」



八「まだありますかね」

主「まだ好いのが幾らもあるね」

八「そんなのがありませんね」

主「放蕩息子を柿に譬へてやツたね」

八「ハ、ア何んとやツたね」

主「悪いとてたゞ一ト筋に棄てるなよ」

澁柿を見よあまぼしとなる

八「旨ねね、小哥も考へた」

主「ハ、ア、た前はどういふのだね」

八「寒いとて唯だ一ト筋に思ふなよ」

巨燧をすれば温くなる

主「そりやア當り前の話だ、冗談なやアない馬鹿くくしい」

八「まだありますかね」

主「此間な、卵子やの娘がお武士に斬られたといふのをやツた

な

八「何んとやりましたな」

主「卵屋の娘斬られてきみわるく

魂ひ飛んで宙をフワ〜



八「旨いなア、小哥もやりました」

主「お前のはどういふんだい」

八「横町の豆腐屋の女房か井戸端で沁ったのをやりました」

主「何んとやツたな」

八「豆腐屋の女房轉んで豆を出し」

鳩が覗ッてかしくアポー〜

主「馬鹿なことを云ふなア」

八「まだありますかね」

主「まだ好いのがあるね」

八「どういふのでがす」

主「人でさへ一斗の餅も搗きかねる」

柵で鼠が餅をどどつく

八「旨いなね、小哥も考へた」

主「何んといふんだい」

八「人でさへ一斗の餅も搗きかねる柵で鼠が餅をどどつく」

主「それは乃公が今やツたんぢやアないか」

八「家主さん、誰れの心も違はねえ」

主「それぢやアいけないから自身にやんなどら」



八「へエー自身にやるんですか

主「さーだ

八「九は病い、五七が雨に四ツ早り

六つ八つなれば風と知るべし

主「そりやア地震の歌ぢやアないか

八「でもお前さんがじいんにやれと仰しやるから……外の面白

いのはありませんか

主「ありますな、私の在所は近在で、毎歳暮になるといふと玄米

が二斗と餅米が二斗來んだ、それを搗やにやツたが、どうして

も搗て寄越しません、あんまり癢に觸るから劍突を食はせやう  
かと思ツたが、そこは狂歌でみやツてる者がと人に言れるから  
柔らかに狂歌でやツた

八「へエー、何んといッてやりました

主「二と三としどをやるのになせぬか

うそをつきやで腹が立ち白

八「ハ、ア旨えことをやツたな此の泥棒……

主「泥棒とは何んだ

八「小哥は表の酒屋に借があります



主「能く方々に借があるなア」

八「此間酒屋の番頭が斯んなことを言やアがッた」

貸しますと返しませんに困ります

現金ならば安く買ります

主流石は酒屋の番頭だ、直ぐに返歌をしたかな

八「ナニ喧嘩はしねえ」

主「返事をやッたか」

八「直ぐにやりました」

主「何んぞやッた」

八「借りますと貰ッたやうに思ひます」

現金ならば他で買ひます

主「お前のは亂暴だ、不人情な男だなア」

八「まだありますかね」

主「この間な、一月の二日だッたな」

八「へエ」

主「他で運坐があッて行きました」

八「へエ」

主「夜が更けたから泊まッたら宜からうといふので、皆なとじや」



こ寝をして仕舞った、すると夜中に女中がブツ〜……………

八「こん畜生、這い込んだな

主「馬鹿なことを言ふな、その女中が大きな放屁をした

八「放屁といふなア何んです

主「てんしきをやっただ

八「てんしきといふのは……………」

主「分らん男だなアおならをしましたな

八「屁を垂れあがったな

主「何んといふことだい、屁だなんて……………そのおならの音に皆な

眼を覺ましましたな

八「ドンと間違へてやがる、飯を食ったらう

主「馬鹿なことを言ひなさるな、その時直ぐにやっただ

八「何んどやりました

主「長き屁の音に眼りの皆眼覺め

なみの屁よりも音のよきかな

八「ハ、ア、旨くやりましたな、驚さいたなア、斯んなとをす

ると人が賞めませうか

主「斯ういふことをすると人が貴ぶ



八「へエー箸と茶碗を持ッてかい

主「それはかッこひんだ、人が重んずるよ

八「提灯に釣種かい

主「それは片荷するんだアな、今た前のことを人が何んといふ

八「八公ッて言います

主「その八公といふのを人が八殿と言ふ

八「八殿と言ッたのは………

主「八様といふ

八「八様と言ッたのは………

主「様が一番上だアな

八「もどりの八か

主「併し感心だなア、ぢやア斯うしやう、態々た前がこの大三

十日に来て狂歌をやる心持があるといふんだからたいは歸し

ません福茶でも入れやう

八「結構でございます、御馳走になりませう

主「それでは私が上の句をやるからた前が下の句を附けなさい

八「何處に下をくッつけるんで………

主「分らないなア、私が上の句をやるから、お前が下の句をやる



んだ

八「どんなことをやツつげるんだ……」

主「私のは

右の手に巻き納めたる古曆

といふんだ

八「何んといふんです……」

主「右の手に巻き納めたる古曆といふんだ

八「弘法様の仰しやるには……」

主「それぢやアムチヤクチヤだ、右の手に巻き納めたる古曆

八「餅は三百買ッて食ふなりといふんで……」

主「それぢやア八公下の句に附かないせ

八「つけねえから三百買いました。」

完

